

仙台市文化財調査報告書第201集

今泉遺跡

—第4次発掘調査報告書—

1995年3月

仙台市教育委員会

仙台市文化財調査報告書第201集

今 泉 遺 跡

—第4次発掘調査報告書—

1995年3月

仙台市教育委員会

序 文

仙台市内には原始の時代から近世にいたる数多くの遺跡がみられ、悠久の昔より人々が生活をいとなみ、文化を築きあげてきたことが窺われます。しかし、今泉地区のみならず市周辺地域は都市化による生活環境が大きく変りつつあり、急速に開発が進んでいるところでもあります。こうした中、開発に伴う発掘調査が行われ先人の生活の様子が明らかにされつつあるところではありますが、事前の記録保存に努力しているというのが現状であります。先人の残した文化財資源を保護し、保存活用を図り、後世に継承して行くことは私たちに課せられた責務と考えるところでもあります。

さて、今回第4次となる今泉遺跡の発掘調査を実施いたしました。調査により中世の城館に関する資料、さらに古く弥生時代・平安時代の貴重な資料が発見され、大きな成果をあげることができました。得られた多くの成果は、地域の歴史を知るうえで貴重な資料となり、今後のまちづくりや学校教育のなかで活かしていきたいと考えております。

最後になりましたが、調査ならびに本報告書の刊行に際しましては多くの方々のご協力、ご助言をいただきましたことを深く感謝申し上げます。

平成7年3月

仙台市教育委員会
教育長 坪山 繁

例 言

1. 本報告書は、宅地造成に伴う今泉遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本書掲載の図1は国土地理院発行の5万分の1「仙台」を複製使用した。
3. 本書中の土色は「新版標準土色帖」(小山・竹原：1973)を使用した。
4. 本分中の方位は真北を基準とし、高さは標高値である。
5. 石製品・礫の材質は東北大学 蟹沢聰史氏に鑑定していただいた。
6. 陶器・磁器類の産地同定は文化財課 佐藤 洋が行った。
7. 本書の執筆・編集は渡部弘美があたった。
8. 本遺跡の出土遺物は仙台市教育委員会が一括保管している。

目 次

序 文

例 言

I. はじめに	1
1. 調査に至る経過	1
2. 調査要項	1
II. 遺跡の位置と環境	2
1. 地理的環境	2
2. 歴史的環境	2
III. 調査の方法と経過	5
IV. 基本層位	6
V. 検出遺構と出土遺物	9
1. III a 層面検出遺構	9
1) 溝跡	9
2) 土坑	9
3) 柱穴・ピット群	10
2. III b 層面検出遺構	10
1) 溝跡	10
2) 井戸跡	11
3. IV 層面検出遺構	11
1) 溝跡	11
2) 土坑・井戸跡	19
3) 竪穴状遺構	20
4) 火葬遺構	23
5) 柱穴・ピット群	23
6) 土器埋設遺構	23
VI. 出土遺物について	23
VII. 総括とまとめ	42

I. はじめに

1. 調査に至る経過

仙台市南東部、若林区東部一帯は、太平洋に向かい続くかぎり田畑が広がる穀倉地帯となっている。近年、宅地開発・道路網整備に伴い、周辺環境は少しずつ変貌をとげている。当遺跡が所在する今泉二丁目地区（旧今泉字久保田）も例にもれず宅地化が進み、田畑が散見する状況となっている。当遺跡は昭和54年・56年に今泉城跡として、平成5年には今泉遺跡として計3回の調査を実施している。中世の城館跡を中心とするが、縄文時代から近世にわたる複合遺跡であることが確認されている。

平成5年7月、三和住宅産業株式会社 代表取締役 加藤文教氏より宅地造成に関わる届が提出された。申請地は前回調査の東側隣接地にあたり、多くの遺構・遺物の発見が予想される地点であった。協議の結果、事前調査を行うことになり、平成6年7月5日より記録保存を目的とした調査を実施するに至った。

2. 調査要項

遺 跡 名 称：今泉遺跡

所 在 地：宮城県仙台市若林区今泉二丁目18

調 査 事 由：宅地造成工事

調査対象面積：約2,400㎡

調 査 面 積：約290㎡

調 査 主 体：仙台市教育委員会

調 査 担 当：仙台市教育委員会文化財課

担 当 職 員：渡部弘美 竹田幸司 三塚 靖

調 査 期 間：平成6年7月5日～10月20日

整 理 期 間：平成6年12月1日～平成7年3月24日

調 査 協 力：三和住宅産業株式会社 株式会社東洋開発コンサルタント

調 査 参 加 者：佐藤良正 針生せつ子 鈴木喜美子 大内孝子 小野さよ子 菊地和江
篠原良子 柴田徳郎 藤田光男 大内松夫 鈴木由美 上野美子
佐々木陽子 大友とみ子 大友泰子 伊東恵美子 伊藤清子 菅井君子
千葉恭子 鈴木峰子 小野栄子 佐藤ケイコ 谷津ミツ子 佐藤としゑ
依田光子

整 理 参 加 者：田中つや子 渡辺まき子 昆 イヨ 須藤啓子 南部節子 大内節子
佐藤悦子 佐藤紀子 佐藤 剛 庄子大介

Ⅱ．遺跡の位置と環境

1. 地理的環境

今泉遺跡は仙台市の南東部、若林区今泉二丁目地内に所在する。JR仙台駅東南約6.5kmの地点にあたり、西方約1.5km地点では名取川と広瀬川の合流点がみられる。

周辺地形を概観すると、奥羽山系の面白山地を源とする名取川が高館・青葉山丘陵を開析東流し、七北田・青葉山丘陵を開析東流する広瀬川が上述の地点で合流し、太平洋に注いでいる。両河川とも中流域で段丘を発達させ、下流域においては広大な沖積地を形成している。当地域は仙台平野のなかの宮城野平野の中央部に位置するが、周辺には自然堤防・後背湿地・旧河道も観察され、海岸部には数列の浜堤もみられる。

現在、今泉周辺は都市化の影響のもと古来の姿は失われつつあるが、周辺集落は自然堤防・浜堤に営まれており、点及び列状に集村形態が観取される。当遺跡はこの自然堤防上に位置し標高は3.5m前後である。地形的にはほぼ平坦面であるが、南側に向かいやや低くなる傾向がみられる。宅地化が進み旧地形の把握は不能であるが、以前には城館の堀跡と考えられる凹地が水田面として部分的に確認されていた。

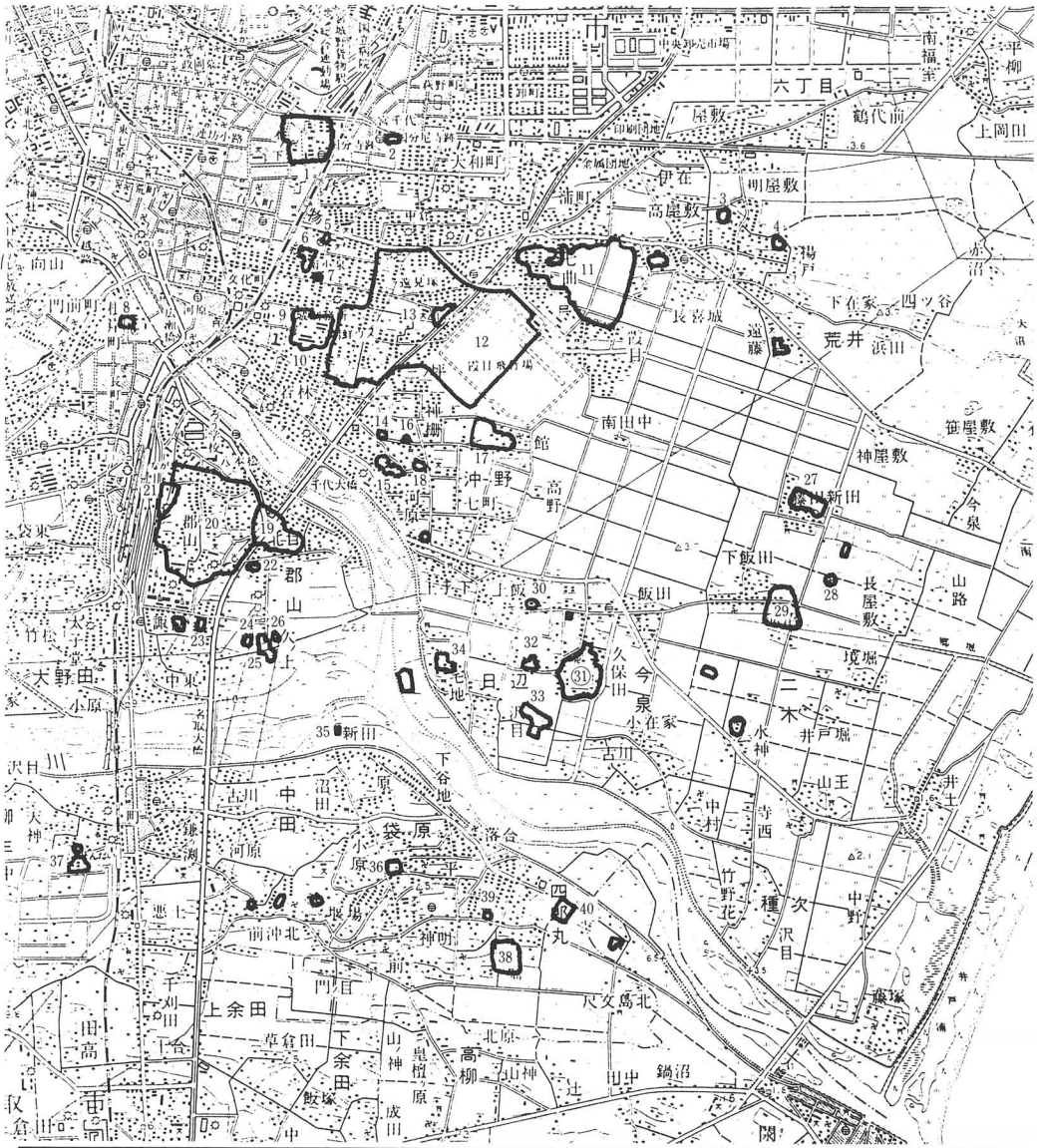
2. 歴史的環境

名取川及び広瀬川周辺地域には、今泉遺跡をはじめとし各時代の遺跡が数多く分布している。ここでは広瀬川左岸の地域を中心に遺跡を概観してみる。

縄文時代 高田B遺跡及び今泉遺跡の2例のみとなっている。高田B遺跡では後・晩期の土器が出土し、後期の住居跡が1軒発見されている。高田B遺跡は新しく周知された遺跡で、今後当時期の遺構・遺物が周辺で発見される可能性は高いが、地理的要因からも生活の場として確立するのは弥生時代以降のことと考えられる。

弥生時代 南小泉・高田B・中在家南・藤田新田・今泉遺跡がある。南小泉遺跡は、昭和10年代霞ノ目飛行場拡張工事の際に多量の遺物が出土し周知された遺跡である。その後の調査で弥生時代から近世いたる遺構・遺物群が発見され、範囲・内容等仙台市を代表する有数の遺跡となっている。中期の合口土器棺等が検出されてはいるが、未だ不明な点が多い。高田B遺跡では中期の水田跡、河川跡から中期の土器群と共に農具等の木製品が出土している。中在家南遺跡では中期の土坑墓・土器墓が検出され、河川跡からは同期の土器と共に多種にのぼる木製農具等が出土している。藤田新田遺跡では土器と共に石庖丁・石斧が出土している。

古墳時代 遠見塚・法領塚・猫塚・下飯田薬師堂古墳等の高塚古墳、南小泉・中在家南・藤田新田・今泉遺跡がある。遠見塚古墳は前期末～中期始めの全長約110mの前方後円墳で市内最大規模をもつ。割竹形木棺が2基確認され、管玉・小玉・豎櫛が出土している。法領塚古墳



No.	遺跡名	種別	立地	時代	No.	遺跡名	種別	立地	時代
1	陸奥国分寺	寺院	沖積地	奈良・平安	21	西台畑遺跡	包含地	自然堤防	弥生・古墳
2	陸奥国分寺尼寺	寺院	沖積地	奈良・平安	22	矢来遺跡	集落跡	自然堤防	古墳・奈良・平安
3	押口遺跡	集落跡	沖積地	奈良・平安	23	籠ノ瀬遺跡	集落跡	自然堤防	古墳・奈良・平安
4	荒井館跡	城館	沖積地	中世	24	欠ノ上I遺跡	集落跡	自然堤防	古墳・奈良・平安
5	法領塚古墳	古墳	沖積地	古墳	25	欠ノ上II遺跡	集落跡	自然堤防	古墳・奈良・平安
6	糞種園遺跡	集落跡	沖積地	平安	26	欠ノ上III遺跡	集落跡	自然堤防	古墳・奈良・平安
7	猫塚古墳	古墳	沖積地	古墳	27	藤田新田遺跡	集落跡	浜堤	弥生・古墳
8	兜塚古墳	古墳	自然堤防	古墳	28	下飯田薬師堂古墳	古墳	沖積地	古墳
9	若林城跡	城館	沖積地	戦国~江戸	29	下飯田遺跡	集落跡	浜堤	古墳・奈良・中世
10	若林城内古墳	古墳	沖積地	古墳	30	梅塚古墳	古墳	沖積地	古墳
11	仙台東郊条里	条里	沖積地	奈良~	①	今泉遺跡	城館	自然堤防	弥生・古墳・中世
12	南小泉遺跡	集落跡	沖積地	縄文~近世	32	高田A遺跡	集落跡	自然堤防	弥生・古墳・奈良・平安
13	遠見塚古墳	古墳	沖積地	古墳	33	高田B遺跡	集落跡	自然堤防	弥生・奈良・平安
14	砂押I遺跡	集落跡	自然堤防	古墳・奈良・平安	34	日辺館跡	城館	沖積地	室町
15	砂押II遺跡	集落跡	自然堤防	古墳・奈良・平安	35	大塚山古墳	古墳	河川敷	古墳
16	神柵遺跡	集落跡	自然堤防	縄文・弥生・奈良・平安	36	中田畑中遺跡	集落跡	自然堤防	古墳・奈良・平安
17	沖野城跡	城館	自然堤防	中世	37	安久東遺跡	集落跡	自然堤防	弥生・古墳・奈良~近世
18	中柵西遺跡	集落跡	自然堤防	弥生・古墳・奈良・平安	38	戸ノ内遺跡	集落跡	自然堤防	弥生・古墳・平安・中世
19	北目城跡	城館	自然堤防	室町・江戸	39	城丸古墳	古墳	自然堤防	古墳
20	郡山遺跡	官衙	自然堤防	古墳・奈良	40	昭北遺跡	集落跡	自然堤防	古墳・平安

図1 今泉遺跡周辺の遺跡

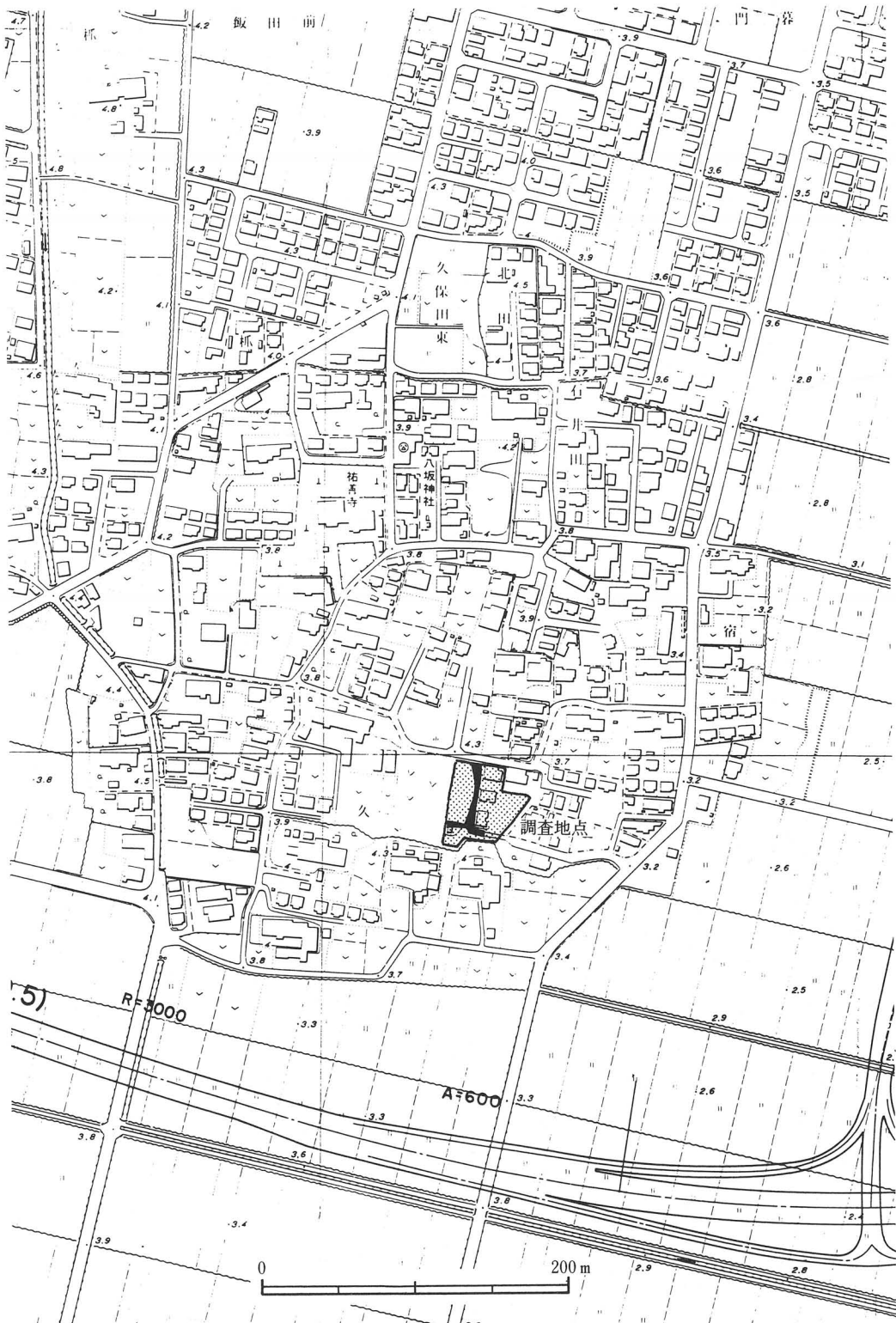


図2 調査地点周辺地形

は横穴式石室をもつ径32mの後期の円墳である。南小泉遺跡では員数の差はあるが古墳時代全般にわたる集落跡が各地点で確認され、当時期の中心地域の一つと考えられる。中在家南遺跡では河川跡から土器群と共に多く木製農具が出土し、前時代から続く生業資料が確認された。藤田新田遺跡では前期から中期にかけての集落跡が確認された。住居跡と共に方形周溝墓・水田跡が発見されている。なお、古墳時代終末期の7世紀後半には、広瀬川・名取川合流点北西部に郡山遺跡が造営される。陸奥国府多賀城以前の官衙で、陸奥国統括の施設と考えられ、7世紀末には付属寺院も建立される。

奈良時代 陸奥国分寺・尼寺・神柵遺跡と確認例は少ない。同寺の建立等関連集落の存在は十分に推察され、今後に期待される。神柵遺跡は遺構・遺物の検討から律令機構末端の施設と考えられる。

平安時代 南小泉・今泉遺跡があるが、南小泉遺跡が再び中心地域となるようで数多くの集落が形成されている。掘立柱建設跡が併設され石帯が出土する集落もみられ、有力層の存在が考えられる。

中世 沖野城跡・今泉・南小泉・下飯田・高田B遺跡がある。沖野城跡は粟野大膳の出城といわれ、堀跡・土塁が確認されている。南小泉・下飯田・高田B遺跡では堀で区画された建物跡が検出され屋敷跡と考えられている。高田B遺跡では水田跡も発見されている。

なお、起源に関しては不明であるが、当地区周辺には真北方向を基準とする一町四方の条里型土地割が広い範囲にわたり観察された。「二の坪」・「三の坪」などの地名が残るが、現在はほぼ煙滅している。

なお、今泉城跡に関する文献には下記のような記述がある。

「仙台領古城書立之覚」

今泉村

平 東西三十六間

一今泉城 南北四十五間

右城主須田玄蕃ト申者百年前迄居住仕候 西＝堀形有リ

四重之土手有リ

Ⅲ. 調査の方法と経過

今回提出された開発予定地は当遺跡の中央部南側にあたり、現況は更地となっている。開発対象地は約2,400㎡にのぼるが、最終的には道路敷部分を中心とした約290㎡の調査を行った。調査区として逆T字形となるトレンチ（南北46m・東西26m）を設定した。調査区南北ラインに6m単位の基準杭を設定し、アルファベット文字で区の名称とした。なお、杭（A・B）は平面直角座標系Xにおける座標値を計測している。

(A : X = -199.007009km、Y = +8.600880km B : X = -199.045731km、Y = +8.596247km)

調査は黒褐色土(Ⅲ層)の上層まで重機で排除し遺構確認を進めた。最終的に基本層はⅠ～Ⅳ層まで確認し、断面観察を含めⅡ・Ⅲ・Ⅳ層面で遺構を確認している。調査はG・H区の東西に延びるトレンチから開始し、後A区からG区へと進めた。遺構は全域で検出されるが、北半部では土坑・井戸・小溝・柱穴等生活跡を連想させる遺構群が分布し、南半部では区画と判断される大溝が東西方向に延びている。中世の遺構が大半を占め、弥生・平安時代の遺構が散見される。遺物は弥生時代から近代にいたる種々のものがあるが、弥生土器及び土師器の量が特に多い。例年のない低気圧・台風の通過により調査区が水没の憂き目に何度となく遭遇し調査が難航したが、無事10月20日に終了することができた。

Ⅳ. 基本層位

調査地点の現況は更地で砂などで厚く盛り土がなされ平坦地となっている。旧地形はB・C付近を境として、北側は畑地で南側は水田となっていることが確認された。最終遺構確認面まで大別で4枚(Ⅰ～Ⅳ)の層を確認している。全体としてシルト質の土壤であるが、Ⅳ層から下部は砂質及び粘土質の土壤となる。遺構はⅡ層・Ⅲ層・Ⅳ層で確認している。C区以南はⅠ層下部がⅣ層面となる。以下、各層の特徴を略述する。

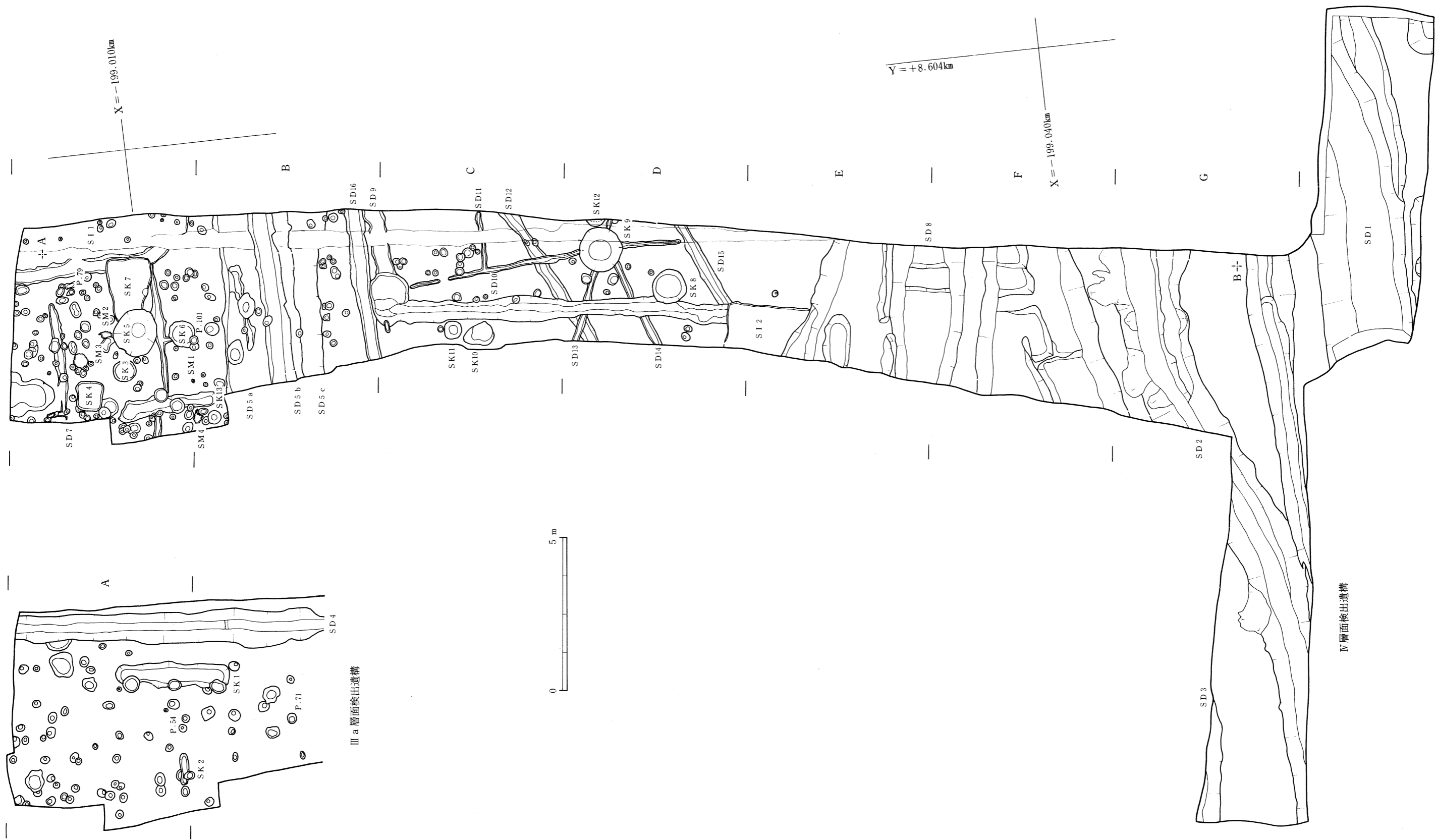
Ⅰ層 = A・B区では畑、C区以南では水田の作土となっている。

Ⅱ層 = 黒褐色のシルト質粘土層である。A区中央部での確認である。層上面でピットを確認している。検出遺構での記述ははぶいた。

Ⅲa層 = 黒褐色のシルト層である。A・B区全域に分布し、弥生時代から中世の遺物が含まれる。層上面で土坑・井戸跡・溝跡・柱穴及びピットを確認している。

Ⅲb層 = 黒褐色のシルト層である。Ⅳ層を起源とする黄橙色土を小ブロック状に含む。Ⅲa層同様の分布で多種の遺物を含む。層下部に暗褐色のシルト層が部分的にみられる。層上面で溝跡・ピットを確認している。

Ⅳ層 = 黄橙色の砂質シルト層である。今回調査の地山面となる。層下部につれて粘土・砂質粘土に変化し、色調も灰白色系となる。多くの遺構の検出面となる。



III a 層面検出遺構

IV 層面検出遺構

図3 調査区遺構配置

V. 検出遺構と出土遺物

検出した遺構には溝跡19条、土坑9基、井戸跡4基、竪穴状遺構2基、火葬遺構1基、土器埋設遺構4基、柱穴・ピットが多数ある。弥生時代及び平安時代の遺構も検出されるが、主たるものは中世の遺構群である。遺物は整理箱10箱程で、弥生時代から近代にいたる各種のものが出土している。遺構は基本層Ⅱ層・Ⅲ(a・b)層・Ⅳ層面での検出となるが、Ⅲb層面遺構は調査時ではⅣ層面で確認しており、壁面等での観察で上層の遺構であることが再確認されたものである。

1. Ⅲa層面検出遺構

1) 溝跡

SD 4 溝跡 A～E区に位置する。南北方向に直線的に延びるもので、すべての遺構を切っている。規模は上端幅80～120cm、下端幅30cm、深さ40cm程を計る。断面形は逆台形である。堆積土は3層確認した。軸方向はN-6°-Eである。遺物には弥生土器、土師器、須恵器、陶器、磁器、白磁、瓦、石製品、鉄製品、ガラス製瓶がある。

2) 土坑

SK 1 土坑 A・B区に位置する。平面形は端部が丸みをもつ不整な長方形である。規模は長軸370cm、短軸60～80cm、深さは最大で28cmを計る。断面形は逆台形及び皿形を呈し、底面は浅い凸凹面となっている。柱穴・ピットとの重複関係がある。堆積土は細別で3層確認した。灰色及び黒色のシルト質の粘土層である。遺物には土師器、須恵

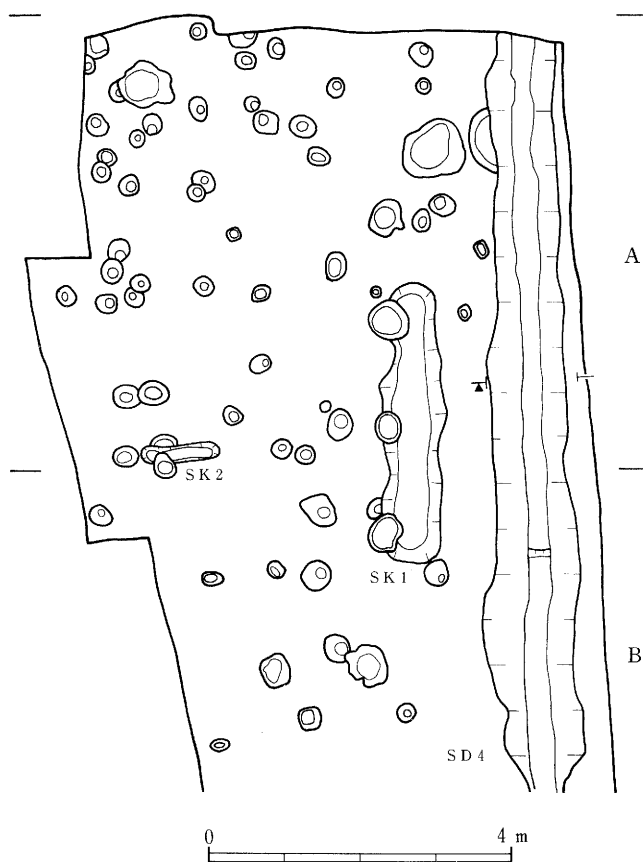
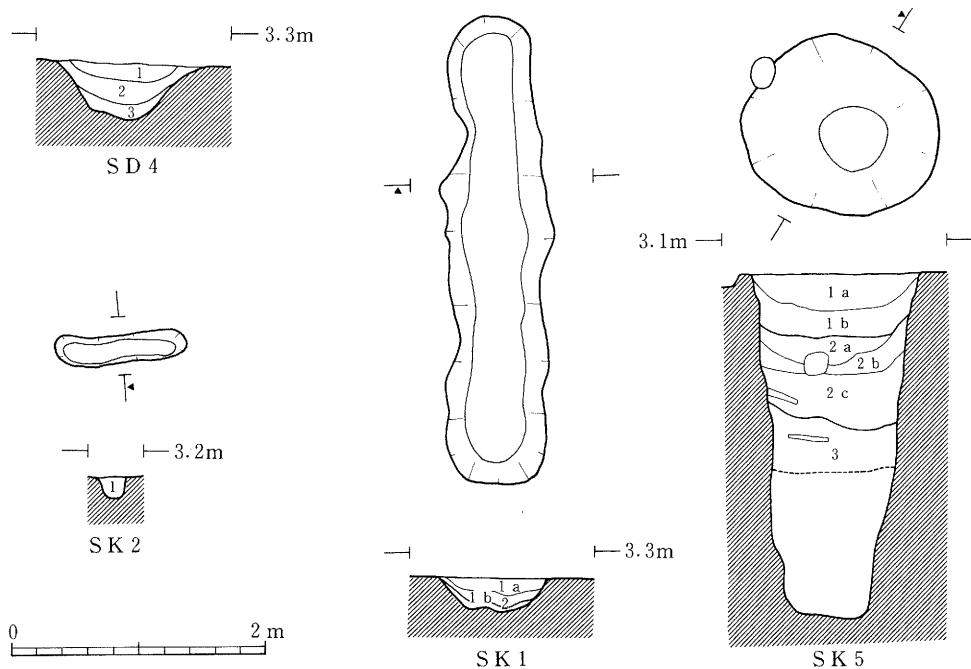


図4 Ⅲa層面検出遺構全体図



遺構名	層位	色 調	性 質	備 考	遺構名	層位	色 調	性 質	備 考
SD 4	1	黒褐色 2.5Y3/2	シルト	グライ化	SK 5	1 a	黒褐色 10Y R3/2	シルト質粘土	炭化物をレンズ状に堆積 粘土含む
	2	灰黄褐色 10Y R4/2	シルト質粘土			1 b	黒褐色 10Y R2/2	粘土	炭化物を含む
	3	黒褐色 10Y R3/2	粘土質シルト	黄褐色土のブロックを塊を含む		2 a	オリーブ黒色 5Y2/2	粘土	炭化物をレンズ状に含む グライ化
SK 1	1 a	黄灰色 2.5Y4/1	シルト質粘土	黄褐色土のブロックを塊を含む		2 b	オリーブ黒色 10Y2/2	粘土	炭化物をレンズ状に含む グライ化
	1 b	暗灰黄色 2.5Y4/2	粘土質シルト	炭化物を含む		2 c	オリーブ黒色 5Y2/2	粘土	木片・植物遺体を含む グライ化
	2	黒褐色 10Y R3/2	シルト質粘土	黄褐色土のブロックを塊を含む		3	オリーブ灰色 5GY6/1	シルト	木片を含む グライ化
SK 2	1	黒褐色 10Y R3/2	シルト	黄褐色土を塊を含む		オリーブ黒色 5GY2/1	粘土		

図5 III (a・b) 層面検出遺構

器がある。

SK 2 土坑 A区に位置する。平面形は両端部が丸い長方形である。規模は長軸106cm、短軸22cm、深さ18cmを計る。断面形はU字形を呈する。ピットを切っている。堆積土は1層確認し、黒色系のシルト層である。弥生土器片が出土している。

3) 柱穴・ピット群

層上面において70個程の柱穴・ピットを検出している。径20~30cmの円形のもので、多くのものに径10~15cm程の柱痕跡が認められた。壁面でも確認されるように上層から掘り込まれたものが混在していると判断されるが分離はできなかった。柱列などの存在が推定されるが調査区の制約等組み合わせは控えた。埋土より多種の遺物が出土している。

2. III b 層面検出遺構

1) 溝跡

SD 5 a 溝跡 B区に位置する。幅広の溝跡として検出したが本来3条の溝跡であることが確

認められ新旧順に a・b・c と名称を付した。SD 5 a は北側部に一段高いテラス状の平坦面をもつ溝で東一西方向に直線的に延びる。ピット・SD 4 に切られ SD 5 b を切っている。規模は上端幅 2～2.3m、テラス部の幅 1～1.3m、溝部の上端幅 80～90cm・下端幅 40～50cm、深さ 40～45cm 程を計る。テラス部はほぼ平坦であるがやや南側に傾斜をみる。底面には不整形なピット・溝状の落ち込みがみられる。溝部は断面形が逆台形で底面はほぼ平坦である。確認長は 5.6m である。堆積土は 3 層確認した。褐色系のシルト・粘土質シルトである。溝部北側の軸方向は N-88°-E である。遺物には弥生土器、土師器、須恵器、陶器（甕・壺・鉢）、緑釉陶器碗、土製品（土錘）、石製品（磨石）がある。

SD 5 b 溝跡 東一西方向に直線的に延びる。SD 5 a・ピットに切られ SD 5 b を切っている。北壁は重複のためほとんど遺存していない。規模は下端幅 20～35cm、深さ 30cm を計る。断面形は逆台形で底面はほぼ平坦である。確認長は 5.5m である。堆積土は 4 層確認した。褐色系のシルト・粘土質シルトである。底面北側の軸方向は E-1°-S である。遺物には弥生土器、土師器、須恵器、陶器甕、古瓦、古銭、石製品（砥石）がある。

SD 5 c 溝跡 東一西方向に直線的に延びる。北壁は SD 5 b に切られ遺存しないが底面高はほぼ同じである。残存下端幅は 50cm 程を計る。底面はほぼ平坦面であるが東側に長円形の落ち込みがみられ一段低くなっている。断面形は遺存部から判断して逆台形と考えられる。深さは最大で 30cm 程である。確認長は 5.4m である。堆積土は 4 層確認した。黒色系のシルトである。底面南側の軸方向は E-2°-S である。遺物には弥生土器、土師器、須恵器、石製品（砥石）がある。

2) 井戸跡

SK 5 井戸跡 A 区に位置する。平面形は円形で、規模は上面径 135～155cm、底面径 60cm 前後、深さ 270cm を計る。断面形は下部が先細りの長方形で、形状は円筒形である。ピットに切られ、SD 6・SK 7・SM 2 を切っている。堆積土は細別で 6 層まで確認した。全体的に黒色系の粘土層である。底面標高値は 0.1m である。遺物には弥生土器、土師器、須恵器、土師質土器皿、陶器（甕・壺）、白磁（碗）、木製品（柄杓・曲物・箸・棒状木製品）、土製品（土錘）がある。

3. IV 層面検出遺構

1) 溝跡

SD 1 溝跡 調査区最南部、H 区を中心に位置する。東西方向に延びる幅広の溝で北辺のみの確認である。残存南北幅は 7.3m を計る。SD 2 を切っている。複数の規模の違う溝・溝状の落ち込みで構成されており断面は凸凹となっている。溝間の境部が土手状の平坦面となり、あたかも三条の溝が並走する状況を呈する。重複関係はなく同時期存在が確認されている。北側溝は上端幅 70～160cm 程で東側に向い幅広となっている。下端幅は 30cm 程で、深さは最大で 65

cmを計る。北壁面は急角度で立ち上がり南側はゆるやかな面となっている。中央溝は上端幅3m、下端幅1.4m程を計る。深さは最大で1.5m、北側の土手状の平坦面からは1m程である。断面形は逆台形を呈する。東側に向かいやや幅広となり、さらに北東側へゆるやかに屈曲をみる。南側溝は壁面付近での確認で詳細は不明であるが急角度の傾斜をもつもので、中央部には幅65cm程の南北方向に延びる削り出しの畝状の高まりが確認されている。北側の土手状の平坦面は幅80cm前後のもので上面が丸みをもつ平坦面となっている。南側の土手状の平坦面は南側の溝と土坑状の落ち込みにより区画されるもので、幅に違いはみられるがT字状を呈している。西側部は幅30cm程の帯状のもので、東側部は南側にやや傾斜をもつ幅広の平坦面となっている。溝の南側は状況から複雑な遺構の展開が予想されるが調査区の制約上不明な点が多い。堆積土は大別で9層確認した。全層はほぼレンズ状に堆積しており、泥炭の5c層は北溝と中央溝を覆っている。北溝付近は粘土質シルト層であるが中央溝付近では泥炭層が主体を占める。なお、基本層Ⅳ層を主体とする混成層の5b層が北側から南側へ流れ込んでいる状況がみられSD8と同様の堆積状況が確認された。遺物には土師器、須恵器、土師質土器鉢、陶器（甕・鉢・播鉢）、磁器（皿・碗）、青磁碗、白磁（皿・瓶）、木製品（椀・下駄・板状木製品）石製品（砥石・石鉢・凹石）、炭化米、クルミがある。

SD1—M溝跡 SD1堆積土3層面で確認した。南壁下部を東—西方向に直線に延びる。幅は150cm以上、深さ35cmを計る。堆積土は3層確認した。灰色の粘土である。遺物には陶器（碗・甕・播鉢・鉢？）、古銭がある。

SD2溝跡 G区に位置する。東西方向に蛇行気味に延びる。SD1に切られている。上端幅200cm前後、下端幅60cm程、深さ最大で50cmを計る。断面形は西側では皿形となるが、東側では段をもつ歪んだ逆台形となる。堆積土は東側で大別で6層確認した。上部には基本層Ⅳ層を主体とする堆積層が全面にみられ、特に西側ではブロック状になっており層理面が凸凹となっている。下層部分は自然堆積と考えられるが、上層部は人為的なものと判断される。遺物には土師器、須恵器、陶器（甕・播鉢・壺？）、石製品（磨石）がある。

SD3溝跡 G区西側に位置する。南辺のみの部分的確認であるが状況から溝跡と判断した。底面は確認していないが壁は急角度で立ち上がる。堆積土は大別で2層まで確認した。1層には基本層Ⅳ層が含まれている。遺物には須恵器、土師質土器がある。

SD6溝跡 A区に位置する。東—西方向に直線的に延びる。ピット・SK5・7に切られている。規模は上部幅20～40cm、下端幅10～20cm、深さ最大で16cmを計る。確認長は4.2cmである。断面形は逆台形である。堆積土は細別で2層確認した。褐色系のシルト質粘土である。軸方向はN-75°-Eである。溝中央部南側に幅20cm程の溝がほぼ直角に取り付きSK6に切られている。遺物には土器片がある。

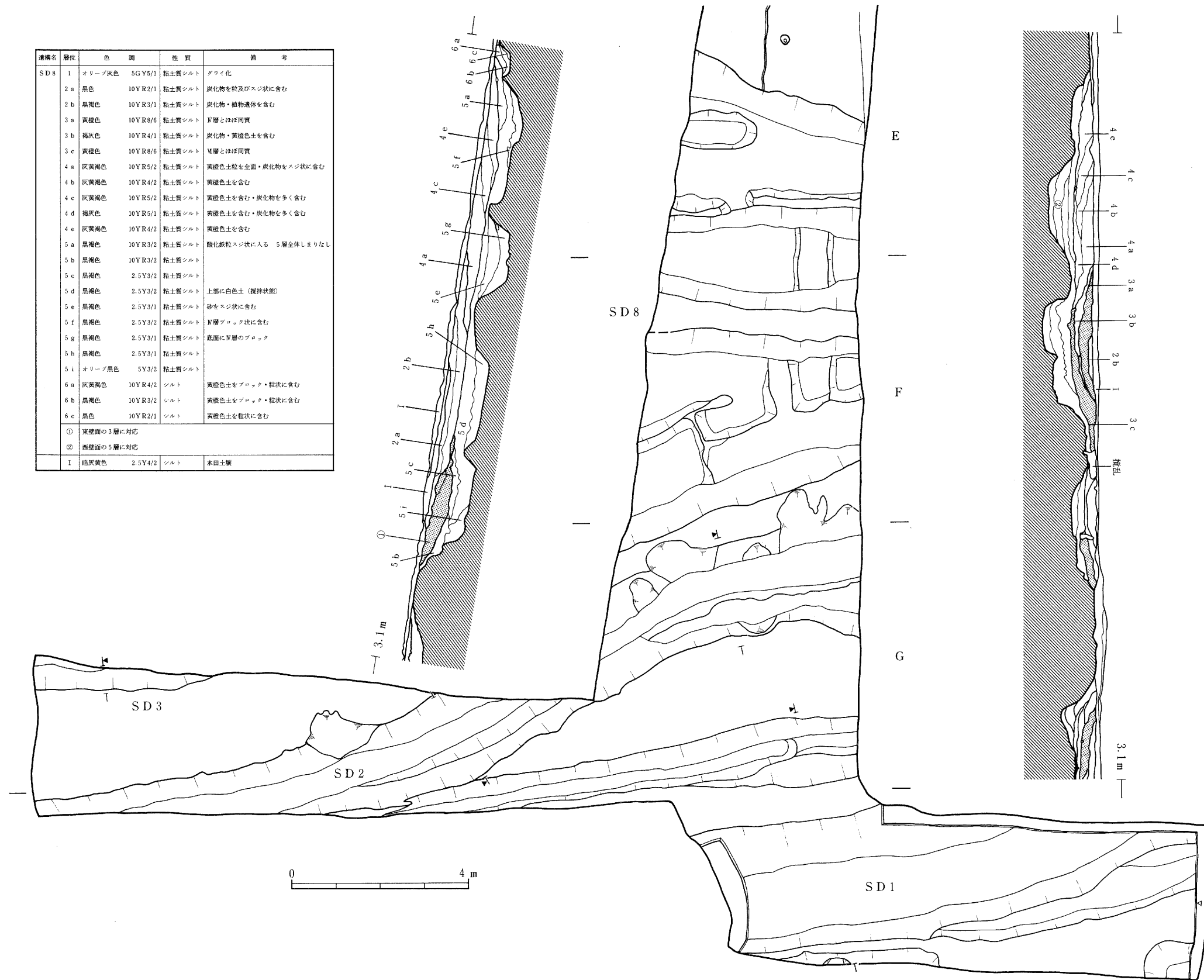
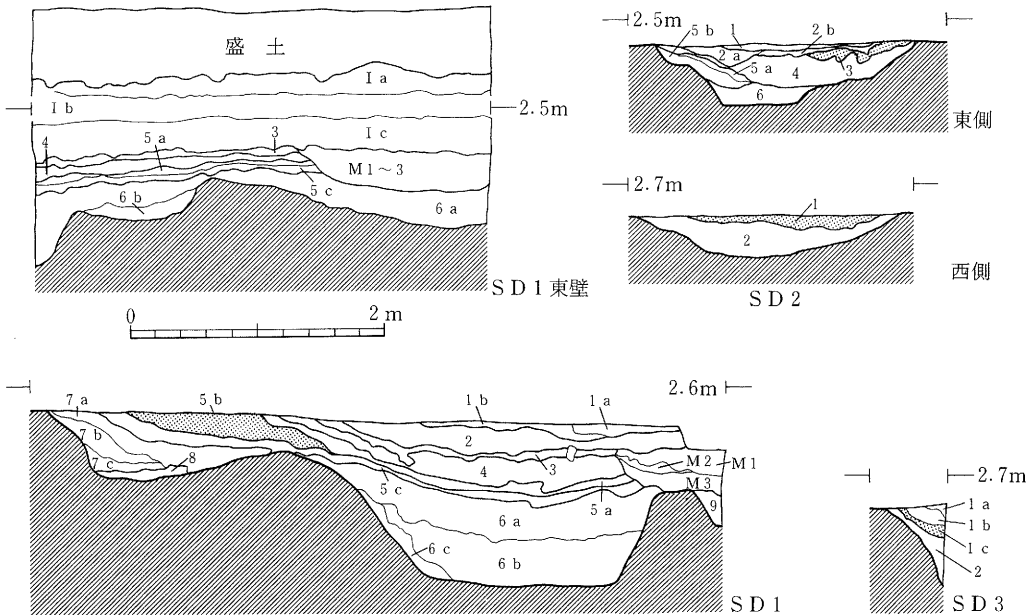


図6 調査区南側遺構群 (N層面)

SD 7 溝跡 A区に位置する。東—西方向に直線的に延びる。ピットに切られている。規模は上端幅35cm、下端幅20cm、深さ10~15cm程を計る。確認長は3.8mである。断面形はやや開いたU字形である。堆積土は細別で2層確認した。褐色のシルト質粘土である。軸方向はN-74°-Eである。溝西部側北側に幅15cm程の溝がほぼ直角に取り付く。遺物には土師器がある。

SD 8 溝跡 E・F区を中心に位置する。東西方向にハの字状に開いており、東壁では幅8m、西壁では幅11.6mと西側が幅広となっている。S I 2・SD 9を切っている。溝中央部に一段低い平行する2条の削り出しの畝状の高まりが東西方向に延び、溝内が三条の凹面（北側部・中央部・南側部）となっている。重複関係はなく同時期存在である。北側部は北辺から北側の



遺構名	層位	色	調	性質	備考	遺構名	層位	色	調	性質	備考	
SD 1	1 a	灰黄褐色	10Y R 4/2	シルト	植物遺体を含まない層は1・2・5 b層のみ	SD 1 M 3	1 a	暗灰黄色	2.5Y 5/2	シルト	水田土壌	
	1 b	褐色	10Y R 4/1	粘土質シルト			1 b	浅黄色	2.5Y 7/3	シルト	水田の客土?	
	2	褐色	10Y R 4/1	粘土	うすい酸化鉄粒の斑文あり		1 c	暗灰黄色	2.5Y 4/2	粘土質シルト	水田土壌	
	3	黒褐色	10Y R 3/1	泥炭	粘土質	SD 2	1	緑灰色	10G Y 6/1	シルト質粘土	グライ化 基本的にM層土 人為地層	
	4	褐色	10Y R 5/1	泥炭	シルト質		(西側) 2	オリーブ黒色	10Y 3/1	粘土		
	5 a	黒褐色	10Y R 2/2	泥炭	植物遺体の含有率が高い		(東側) 1	1	にぶい黄褐色	10Y R 5/3	シルト	炭化物・酸化鉄粒を含む
	5 b	浅黄色	2.5Y 7/4	粘土質シルト	M層土 土壌の別働土?			2 a	褐色	10Y R 4/1	粘土質シルト	淡黄色土小ブロックで含む
	5 c	黒褐色	10Y R 3/2	泥炭				2 b	にぶい黄褐色	10Y R 5/3	シルト	
	6 a	黄灰色	2.5Y 4/1	泥炭	層全体が攪拌状態			3	淡黄色	2.5Y 8/4	粘土質シルト	基本的にM層土
6 b	黒褐色	2.5Y 3/2	泥炭	やや粘土質	4			黒褐色	10Y R 3/2	粘土質シルト	しまりなし	
6 c	灰色	7.5Y 4/1	粘土質シルト	砂を含む グライ化	5 a			褐色	10Y R 4/1	砂質シルト		
7 a	灰色	7.5Y 5/1	粘土質シルト	やや砂質 グライ化	5 b		黒褐色	10Y R 3/1	粘土質シルト	淡黄色土小ブロックで含む 砂を含む		
7 b	浅黄色	2.5Y 7/4	粘土質シルト	壁崩壊土? グライ化	6	褐色	10Y R 4/1	粘土質シルト	しまりなし			
7 c	黒褐色	2.5Y 3/2	粘土質シルト	グライ化	SD 3	1 a	オリーブ灰色	5G Y 5/1	シルト質粘土	炭化物を含む		
8	緑灰色	7.5G Y 5/1	粘土質シルト	グライ化		1 b	暗灰黄色	2.5Y 5/2	粘土	明黄褐色土との互層		
9	緑灰色	7.5G Y 5/1	粘土質シルト	グライ化		1 c	暗灰黄色	2.5Y 5/2	粘土	明黄褐色土との互層 炭化物を多く含む		
SD 1	M 1	灰色	5Y 4/1	粘土		2	暗灰黄色	2.5Y 4/2	シルト質粘土	炭化物・植物遺体を含む		
	M 2	灰色	7.5Y 4/1	粘土	グライ化							

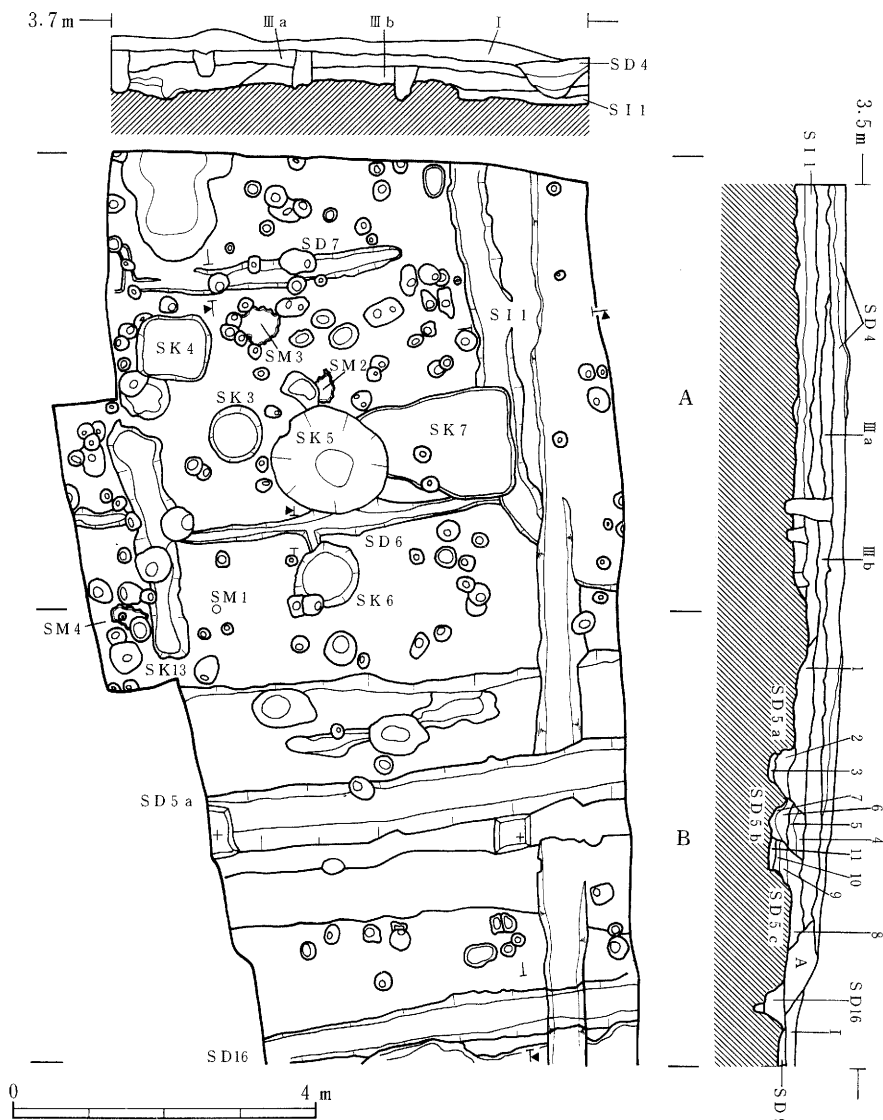
図7 SD 1・2・3 溝跡断面

畝状の高まり（北側畝）までである。北壁はゆるやかに立ち上がり（底面から約25度）、最大残存高70cmを計る。底面はほぼ平坦で南側へゆるやかな傾斜をみる。北西側に長軸150cm以上、短軸90cm、深さ20cm程の長円形の落ち込みがある。北側畝は頂部が幅20cm程の平坦面で、底面との比高差は最大で30cmを計る。中央部は北側畝から南側畝までである。北側畝はきつく立ち上がり（底面から約50度）、底面との比高差は最大で55cmを計る。底面はほぼ平坦で、東側には長さ170cm、幅70cm、高さ10cm前後の南北方向に延びる一段低い畝状の高まりが南北両側の畝に直結している。北側部と中央部は北側畝を境とし底面が30～45cm程の高低差をもち北側が高くなっている。南側部は南側畝から南辺までである。南側畝は断面形が台形を呈し、底面での幅145～180cm、上端部幅60～80cm、残存高最大で60cmを計る大きなものである。上部は平坦面となっている。壁面の立ち上がりは北面が45～50度程で南面が35度程と北面がきつくなっている。底面には中央部と同様に5～35cm程の一段低い高まりが畝及び突起状に東西・南北方向に延び南側畝・南壁に直結している。方向的には南壁に対し並行・直交となっている。南側畝を挟む両底面に高低差はほとんどない。南壁はきつく立ち上がり（底面から約40度～50度）、最大残存高は90cmを計る。堆積土は大別で6層確認した。全層ほぼレンズ状堆積を呈している。東西調査区壁部ではSD1と同様に基本層Ⅳ層を主体とする黄橙色土が南側から北側へ流れ込んでいる状況が確認されている。遺物には弥生土器、土師器、須恵器、陶器（梅瓶・甕・壺・鉢・灰釉平碗）、瓦質土器小壺、古瓦、古銭、木製品（椀・下駄・板状木製品・棒状木製品）、石製品（砥石・有孔石製品）、馬歯、クルミがある。なお、調査区南西部で検出されたSD3は位置及び堆積土の状況からみてSD8に帰属するものかと考えられる。

SD9溝跡 C～E区に位置する。B・C区境で屈曲し二辺が確認される溝である。ピット・SK8・SI2・SD8・火葬遺構に切られ、SD12・13・14・15・16を切っている。南一北方向に延びる溝は上端幅55～90cm、下端幅20～40cm、深さ30cm程である。確認長は14.4mである。断面形はやや不整な逆台形を呈する。コーナー部及び東一西方向の溝は底面高が一段高くなり断面形も皿形となる。確認長は3.9mである。堆積土は3層確認した。褐色系のシルト・粘土質シルトである。南北部溝の軸方向はN-7°-Eである。遺物には弥生土器、土師器、須恵器、古瓦がある。

SD10溝跡 C・D区に位置する。南一北方向に直線的に延びる。ピット・SK9に切られSD12を切っている。規模は上端幅20cm、下端幅10cm、深さ10cm程を計る。確認長は8.9mである。断面形はU字形である。堆積土は1層確認した。黒褐色のシルトである。軸方向はほぼN-5°-Wである。距離的には離れるが溝北側延長上にSD6南側に取り付く溝があり、方向・位置的にみて関連をもつものかと考えられる。遺物には陶器鉢[?]がある。

SD11溝跡 C区に位置する。SD10の東側に直線的に取り付く溝である。重複関係はない。



遺構名	層位	色 調	性 質	備 考	遺構名	層位	色 調	性 質	備 考			
	I	灰黄褐色	10Y R 4/2	シルト	調査区北側の畑の耕作土	SD5b	4	黒褐色	10Y R 3/2	シルト	炭化物粒を含む	
	I'	灰黄褐色	10Y R 4/2	粘土質シルト	調査区南側の水田土壌		5	灰黄褐色	10Y R 4/2	シルト	炭化物粒・酸化鉄粒を含む	
	A	黒褐色	10Y R 3/2	シルト	畑地と水田の境部		6	褐色	10Y R 4/4	粘土質シルト	炭化物・酸化鉄を粒状に細かく含む	
	III a	黒褐色	10Y R 2/2	シルト	炭化物粒・焼土・土器片を含む		7	黒褐色	10Y R 2/2	粘土質シルト	炭化物・酸化鉄を粒状に細かく含む	
	III b	黒褐色	10Y R 2/3	シルト	炭化物粒・焼土・土器片を含む		SD5c	8	黒褐色	10Y R 2/3	シルト	炭化物・酸化鉄・黄褐色土を粒状に含む
SD6a	1	暗褐色	10Y R 3/3	シルト	炭化物粒を凝ら含む			9	黒色	10Y R 2/2	シルト	灰黄褐色土スジ状に堆積
	2	黒褐色	10Y R 3/2	シルト	炭化物・明黄褐色土を粒状に含む			10	黒色	10Y R 2/1	シルト	灰黄褐色土スジ状に堆積
	3	明黄褐色	10Y R 7/6	粘土質シルト	暗褐色土をブロックで含む	11		明黄褐色	10Y R 7/6	粘土質シルト	黒色土スジ状に堆積	

図 8 調査区北側遺構群 (IV層面)

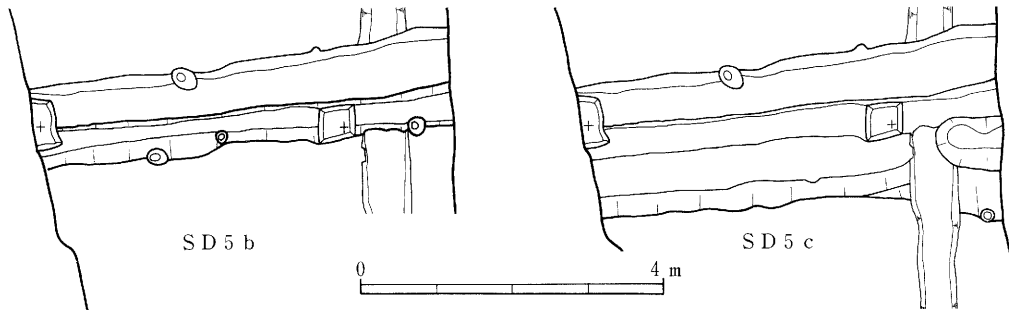


図9 SD 5 b・5 c溝跡平面

規模は上端幅20cm、下端幅15cm、深さ6cm程である。確認長は1.8mである、断面形はU字形である。堆積土は1層確認した。黒褐色の粘土質シルトである。軸方向は $N-76^{\circ}-E$ である。遺物には土師器がある。

SD12溝跡 C区に位置する。北東—南西方向に直線的に延びる。ピット・SD 9・10・13に切られている。規模は上端幅40~50cm、下端幅20~25cm、深さ10cm程を計る。確認長は5.1mである。断面図は皿形である。堆積土は1層確認した。暗褐色のシルト層である。軸方向は $N-48^{\circ}-E$ である。土器片が少量出土している。

SD13溝跡 D区に位置する。北西—南東方向に直線的に延びる。ピット・SK 9・SD 9に切れSD 12を切っている。規模は上端幅20cm、下端幅10~15cm、深さ6cm程を計る。確認長は4.1mである。断面形は皿形である。堆積土は1層確認した。黒褐色の砂質シルトである。軸方向は $E-7^{\circ}-S$ である。土器片が少量出土している。

SD14溝跡 D区に位置する。北東—南西方向に直線的に延びる。SK 9・SD 9に切られている。規模は上端幅20~30cm、下端幅10~15cm、深さ8cm程を計る。確認長は3.1mである。断面形は皿形である。堆積土は1層確認した。黒褐色のシルトである。軸方向は $N-54^{\circ}-E$ である。土器片が少量出土している。

SD15溝跡 D区に位置する。北東—南西方向に直線的に延びる。SK 9・SI 2に切られている。規模は上端幅40cm、下端幅20cm、深さ10cm程を計る。確認長は4.8mである。断面形は皿形である。堆積土は1層確認している。暗褐色のシルトである。軸方向は $N-50^{\circ}-E$ である。土器片が少量出土している。

SD16溝跡 B区に位置する。東—西方向に直線的に延びる。ピット・SD 9に切られている。規模は上端幅50~60cm、下端幅30~40cm、深さ25cm程を計る。確認長は5mである。断面形は逆台形である。堆積土は細別で4層確認した。黒褐色系のシルト・粘土質シルトである。1層中には灰白色火山灰が斑及びレンズ状に含まれる。底面はほぼ平坦である。軸方向は $N-88^{\circ}-E$ である。遺物には弥生土器、土師器坏、須恵器、赤焼土器坏がある。

2) 土坑・井戸跡

SK 3土坑 A区に位置する。平面形は円形である。規模は上面径70~75cm、底面径60cm程、深さ20cmを計る。壁はきつく立ち上がり、断面形はやや丸みをもつ長方形である。堆積土は1層確認した。黒褐色土と黄橙色土の混成層で人為堆積である。遺物には土師器がある。

SK 4土坑 A区に位置する。ピットを切っている。平面形はやや不整の隅丸の方形を呈する。規模は東西軸95cm、南北軸85cm、深さ30cm程を計る。断面形は底面端が丸みをもつ長方形である。堆積土は3層確認した。黒色系の粘土質シルトである。遺物には弥生土器、土師器がある。

SK 7土坑 A区に位置する。ピット・SD 4・SK 5に切られ、SD 6・S I 1を切っている。平面形は長方形を基調とする不整形である。規模は東西軸北側で205cm以上、南北軸最大で145cm、深さ4cm程である。遺存が不良で壁はゆるく立ち上がり、底面はほぼ平坦面であるが凸凹面となっている。堆積土は1層確認した。灰黄褐色のシルトである。遺物には弥生土器、土師器、須恵器、土製品(土錘)がある。

SK 10土坑 C区に位置する。平面形は不整な三角形を呈する。規模は長軸1m、深さ最大で35cmを計る。底面はやや凸凹面となるが、断面形はほぼ逆台形である。堆積土は細別で4層確認した。黄褐色系のシルト質粘土である。遺物には土師器、須恵器がある。

SK 11土坑 C区に位置する。ピットを切っ

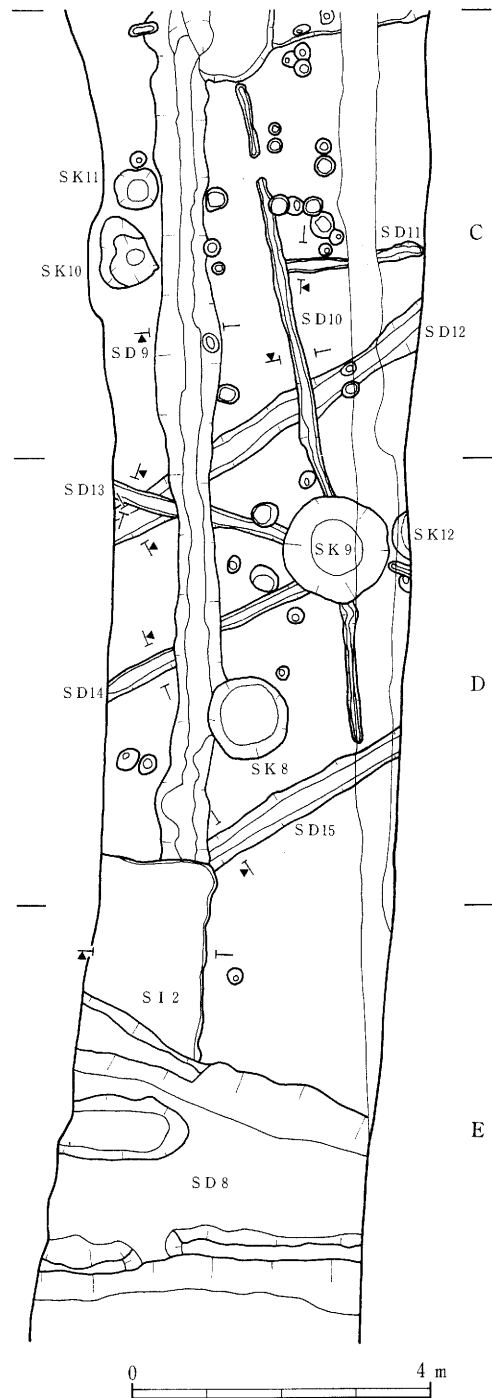


図10 調査区中央遺構群

ている。平面形はほぼ円形である。規模は径55～60cm、深さ25cmを計る。壁はゆるく立ち上がり、断面形は播鉢形である。堆積土は2層確認した。褐色系のシルト質粘土である。遺物には土師器、須恵器がある。

SK12土坑 D区東壁確認のものである。平面形は推定径70cm程の円形と考えられる。堆積土は黒褐色土を1層確認している。遺物には弥生土器、土師器、須恵器、土製品（土錘）がある。

SK13土坑 A・B区に位置する。ピット・SD6に切られている。平面形は長方形の溝状を呈する。南北軸320cm、東西軸最大で75cm、深さ最大で20cmを計る。底面はやや凸凹面で、壁はきつく立ち上がる。断面形は長方形を呈する。堆積土は2層確認した。褐色系のシルトで1層には灰白色火山灰がみられる。遺物には弥生土器、土師器、須恵器、土製品（土錘）がある。

SK6井戸跡 A区に位置する。平面形は円形である。規模は上面径85～90cm、底面径70cm前後、深さ290cmを計る。壁が崩落し不整な湾曲面をみるが、断面形は長方形で形状は円筒形である。堆積土は細別で3層まで確認した。暗褐色及び黒色の粘土層である。SD6南側部の小溝を切っている。遺物には弥生土器、土師器、須恵器、石製品（砥石）、鉄製品（鍋）がある。

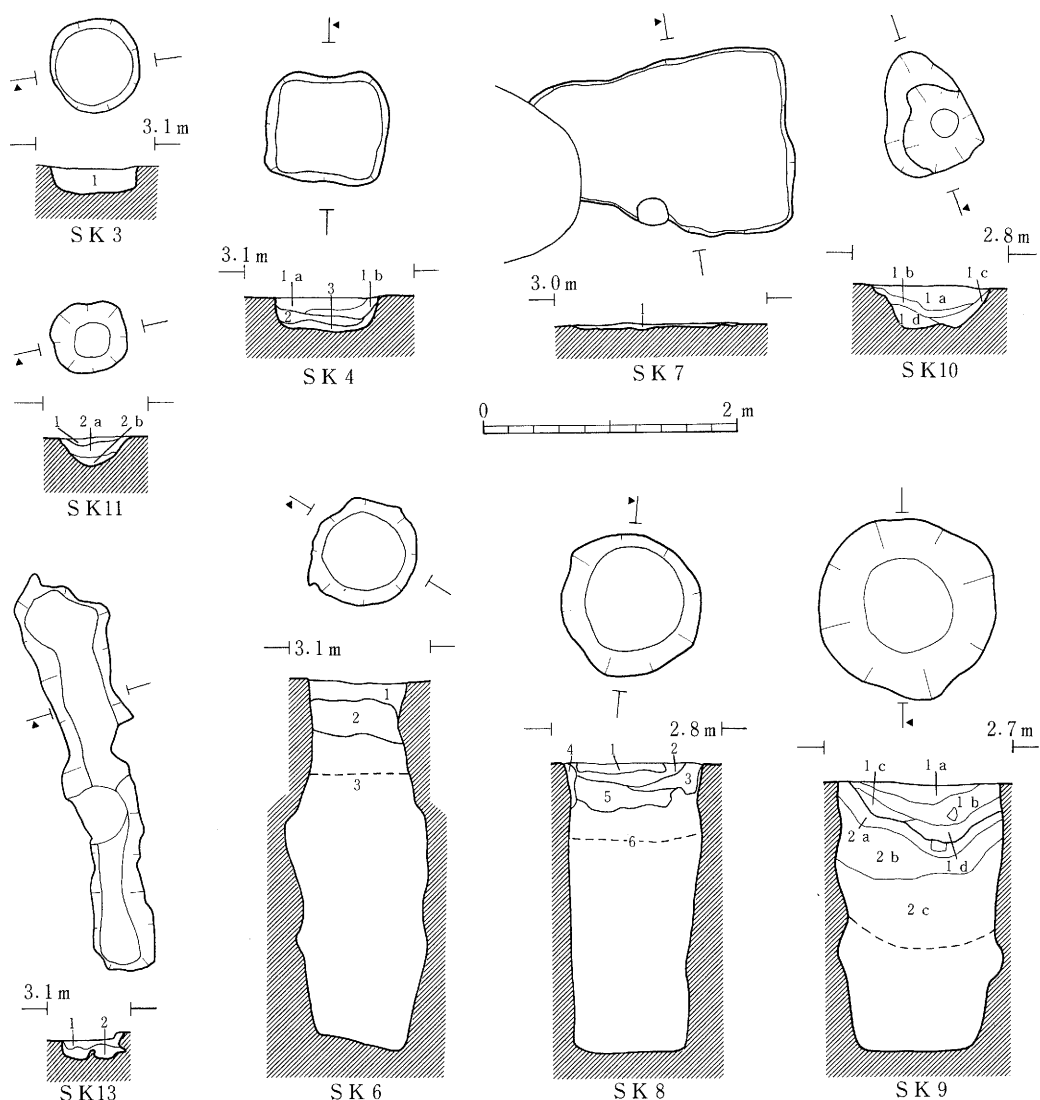
SK8井戸跡 D区に位置する。平面形は円形である。規模は上面径110～115cm、底面径80cm前後、深さ225cmを計る。断面形は長方形で形状は円筒形である。堆積土は細別で6層まで確認した。褐色形の粘土層である。SD9を切っている。遺物には弥生土器、土師器、木製品（曲物側板・底板）、石製品（茶臼の上臼・下臼、粉挽き臼の下臼）がある。

SK9井戸跡 D区に位置する。平面形は円形である。規模は上面径140cm、底面径75cm前後、深さ210cmを計る。断面形は長方形で形状は円筒形である。堆積土は細別で7層まで確認した。褐色系の粘土層である。SD10・13・14を切っている。遺物には土師器、須恵器、木製品（柄杓）、石製品（石鉢・粉挽き臼の下臼）、鉄製品（釘）がある。

3) 竪穴状遺構

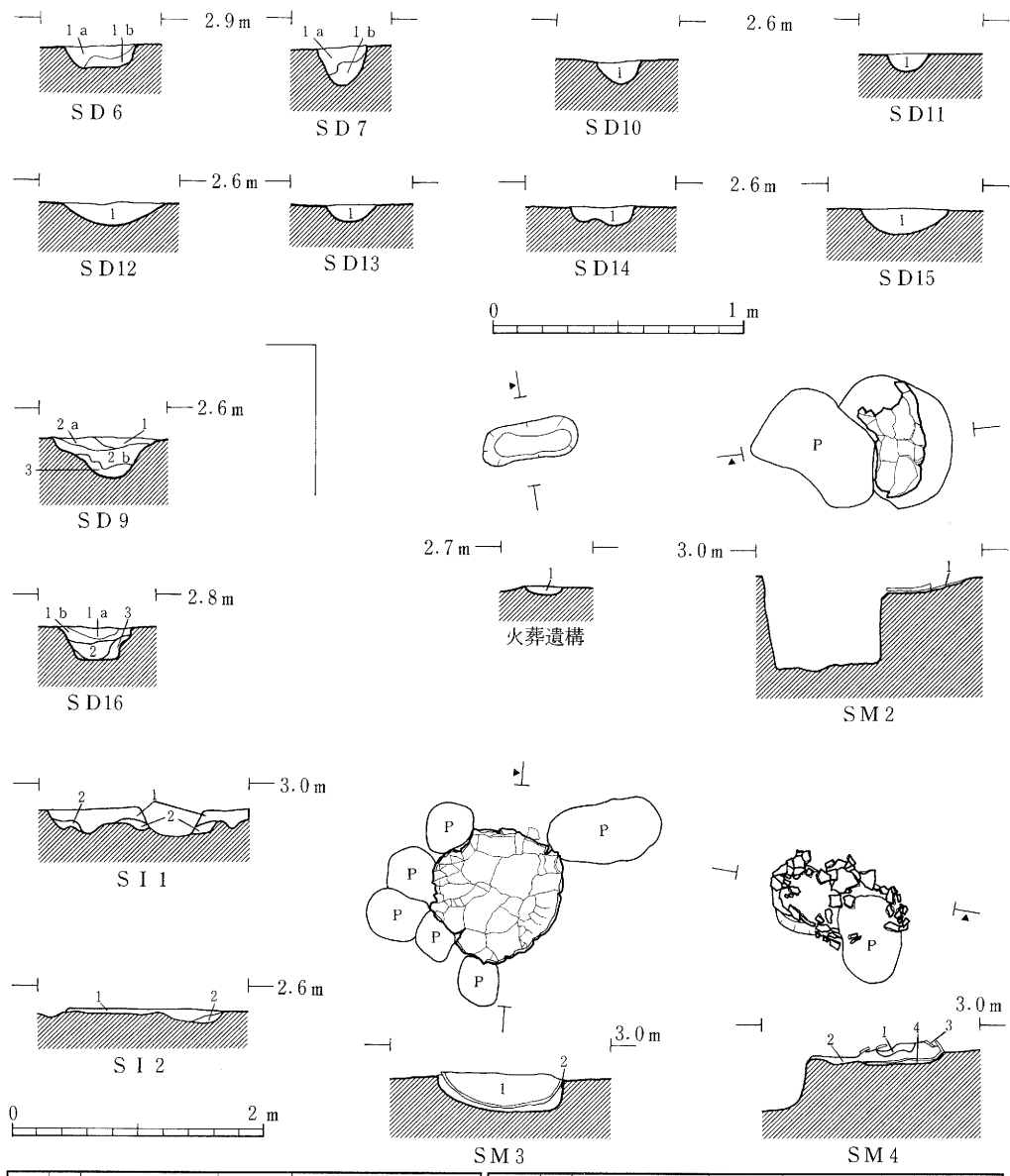
SI1竪穴状遺構 A区に位置する。直線的に延びる西辺とやや屈曲をみる南辺の一部が確認され、平面図は隅丸の方形を呈すると考えられる。SD4・SK7・ピットに切られている。西辺の確認長は5m程を計る。西辺側には幅50cm・深さ10cm程の周溝状の落ち込みが巡る。底面は南側がほぼ平坦面となるが北側は凸凹面となっている。堆積土は2層確認した。黒褐色のシルトである。遺物には弥生土器、土師器、須恵器、陶器甕がある。

SI2竪穴状遺構 D・E区に位置する。調査区西側に遺構が延びるがほぼ直角にとりつく北辺と東辺の一部が確認され平面形は方形と判断される。SD8に切られSD9・15を切っている。確認長は北辺が145cm、東辺が260cmを計る。遺存が不良で壁高は5cm程であるが底面はほぼ平坦である。堆積土は2層確認した。黒色系のシルト質粘土である。土器片が少量出土している。



遺構名	層位	色調	性質	備考	遺構名	層位	色調	性質	備考		
SK 3	1	黒褐色 10Y R3/3	シルト質粘土	黄褐色土がブロックで含む	SK 6	1	暗褐色 10Y R3/3	シルト	明黄褐色土を斑に含み炭化物を少量含む		
		黄褐色 10Y R7/8	シルト	鹿皮層 人為堆積		2	黒褐色 10Y R3/2	粘土質シルト	炭土を斑に含む		
SK 4	1a	黒褐色 10Y R2/2	粘土質シルト	N層及び炭化物を含む		3	オリーブ黒色 5Y3/1	粘土	グライ化		
	1b	黒褐色 10Y R3/1	粘土質シルト	N層を含む	SK 8	1	浅黄褐色 10Y R8/4	シルト質粘土	炭化物を少量含む		
	2	褐灰色 10Y R4/1	シルト質粘土	炭化物を含む		2	にぶい黄褐色 10Y R4/3	シルト質粘土			
3	黒褐色 10Y R2/2	粘土質シルト	明黄褐色土との互層	3		黒褐色 10Y R3/1	シルト質粘土				
SK 7	1	灰黄褐色 10Y R4/2	シルト	N層を斑に含む		4	褐灰色 10Y R5/1	シルト質粘土			
	SK 10	1a	黄褐色 10Y R5/6	シルト質粘土		SK 9	5	灰色 10Y R8/2		シルト質粘土	
		1b	にぶい黄褐色 10Y R5/4	シルト質粘土			炭化物を含む	6		黒褐色 10Y R3/1	シルト質粘土
		1c	にぶい黄褐色 10Y R4/3	シルト質粘土	炭化物を含む		SK 9	1a	にぶい黄褐色 10Y R5/3	シルト質粘土	炭化物を含む
1d		灰黄褐色 10Y R5/2	シルト質粘土	炭化物を含む	1b			にぶい黄褐色 10Y R4/3	シルト質粘土	炭化物を含む	
SK 11	1	褐灰色 10Y R5/1	シルト質粘土	炭化物を含む	1c	にぶい黄褐色 10Y R5/3		シルト質粘土	炭化物を含む		
	2a	黒褐色 10Y R3/1	シルト質粘土	SK 13	1d	にぶい黄褐色 10Y R5/3		シルト質粘土			
SK 13	1	暗褐色 10Y R3/3	シルト		灰白色火山灰を少量含む	2a		灰褐色 10Y R4/2		シルト質粘土	炭化物を含む
	2	明黄褐色 10Y R6/6	シルト			2b		褐灰色 10Y R5/1		シルト質粘土	炭化物を含む
SK 8	4	黒褐色 10Y R3/1	シルト質粘土			2c	褐灰色 10Y R4/1	シルト質粘土			
	SK 9	1a	にぶい黄褐色 10Y R5/3		シルト質粘土	炭化物を含む					
		1b	にぶい黄褐色 10Y R4/3		シルト質粘土	炭化物を含む					
1c		にぶい黄褐色 10Y R5/3	シルト質粘土	炭化物を含む							
SK 9	1d	にぶい黄褐色 10Y R5/3	シルト質粘土	炭化物を含む							
	2a	灰褐色 10Y R4/2	シルト質粘土	炭化物を含む							
	2b	褐灰色 10Y R5/1	シルト質粘土	炭化物を含む							
SK 9	2c	褐灰色 10Y R4/1	シルト質粘土	炭化物を含む							

図11 土坑・井戸跡平・断面



遺構名	層位	色調	性質	備考	遺構名	層位	色調	性質	備考		
SD 6	1 a	にぶい・黄褐色	10Y R 4/4	シルト質粘土	炭化物を少量含む	SD 16	1 b	黒褐色	10Y R 3/2	シルト	灰白色火山灰斑を含む
	1 b	明黄褐色	10Y R 6/6	シルト質粘土	炭化物を少量含む		2	黒褐色	10Y R 2/2	粘土質シルト	黄褐色土・酸化鉄粒を含む
SD 7	1 a	褐色	10Y R 4/4	シルト質粘土	炭化物少量含む		3	黒褐色	10Y R 2/2	粘土質シルト	黄褐色土との混成層
	1 b	暗褐色	10Y R 3/4	シルト質粘土		SI 1	1	暗褐色	10Y R 3/3	シルト	酸化鉄粒塔を含む
SD 10	1	黒褐色	10Y R 3/2	シルト	草層を粒状に含む	2	黒褐色	10Y R 2/2	シルト	黄褐色土まばらを含む	
SD 11	1	黒褐色	10Y R 3/1	粘土質シルト	草層をブロックで含む	SI 2	1	黒色	10Y R 2/1	シルト質粘土	黒褐色・黄褐色土のブロック、炭化物を含む
SD 12	1	暗褐色	10Y R 3/3	シルト	黄褐色土斑を含む	2	黒褐色	10Y R 3/2	シルト質粘土	黄褐色土のブロックを含む	
SD 13	1	黒褐色	10Y R 3/2	砂質シルト	黄褐色土斑を含む	火葬遺構	1	黒褐色	10Y R 2/2	シルト	焼土・炭化物・骨片からなる
SD 14	1	黒褐色	10Y R 3/2	シルト	黄褐色土斑を含む	SM 2	1	にぶい・黄褐色	10Y R 4/3	シルト	掘り方埋土
SD 15	1	暗褐色	10Y R 3/3	シルト	黄褐色土・酸化鉄粒を含む	SM 3	1	暗褐色	10Y R 3/4	シルト	明黄褐色土が混じる
SD 9	2 a	暗褐色	10Y R 3/3	シルト		黄褐色土・酸化鉄粒を含む	2	にぶい・黄褐色	10Y R 4/3	シルト	掘り方埋土
	2 b	黒褐色	10Y R 3/2	シルト	黄褐色土・酸化鉄粒を含む	SM 4	1	褐色	10Y R 4/4	シルト質粘土	黄褐色土のブロックを含む
	3	浅黄褐色	10Y R 8/3	粘土	黒褐色土を斑を含む		2	黒褐色	10Y R 3/2	シルト	黄褐色土のブロックを含む
SD 16	1 a	にぶい・黄褐色	10Y R 4/3	シルト	層下部に灰白色火山灰メシ状に堆積	3	にぶい・黄褐色	10Y R 6/4	シルト	黄褐色土のブロックを含む	
						4	暗褐色	10Y R 3/3	粘土質シルト	掘り方埋土	

図12 溝跡・竪穴状遺構・火葬遺構・土器埋設遺構平・断面

4) 火葬遺構

C区に位置する。1基確認した。遺存が不良で長軸40cm、短軸15cm、深さ3cmの長円形のピット状となっている。炭化物・焼土・骨片が混在している。壁面に明確な焼面は認められなかったが3次調査において同様な遺構が確認されており火葬遺構と判断した。土器類の出土はない。

5) 柱穴・ピット群

Ⅳ層面においても数多くのピット・柱穴を確認している。A区からE区にかけて分布しており、特にA区では密集状態である。建物跡・堀跡が想定されるがⅢ層面遺構と同様に不明である。B区から以南は開田のためⅡ・Ⅲ層自体が存在しなく、ピット・柱穴の数が南側に向かい減少する。削平のためとも考えられるが、南側には外堀と考えられる大溝が位置しており場の性格の違いが起因とも判断される。埋土より各種の遺物が出土している。

6) 土器埋設遺構

4基確認した。すべての遺構で弥生土器壺が横位状態で確認されている。他の遺構に切られ土器自体欠損がいちじるしく部分的な遺存である。SM1は特に遺存がわるいが出土状況などから遺構と認定した。

SM1 土器埋設遺構 A区南側に位置する。削平をうけ小片となった土器のみの確認で掘り方は不明である。土器は基本層Ⅳ層面に密着している。

SM2 土器埋設遺構 A区中央部に位置する。径55cm程の円形の掘り方内で土器が確認された。断面は皿状である。土器下部に基本層Ⅳ層に類似する埋土がうすくみられるがほぼ土器が底面に密着している。土器の方向（底部一口縁部）はN-70°-Eである。壺以外の遺物はない。

SM3 土器埋設遺構 A区北側に位置する。径50cm程の円形の掘り方内で土器が確認された。底面は皿状であるが壁はきつく立ち上がる。掘り方埋土は基本層Ⅳ層に類似するものである。土器の方向はE-34°-Sである。壺以外の遺物はない。

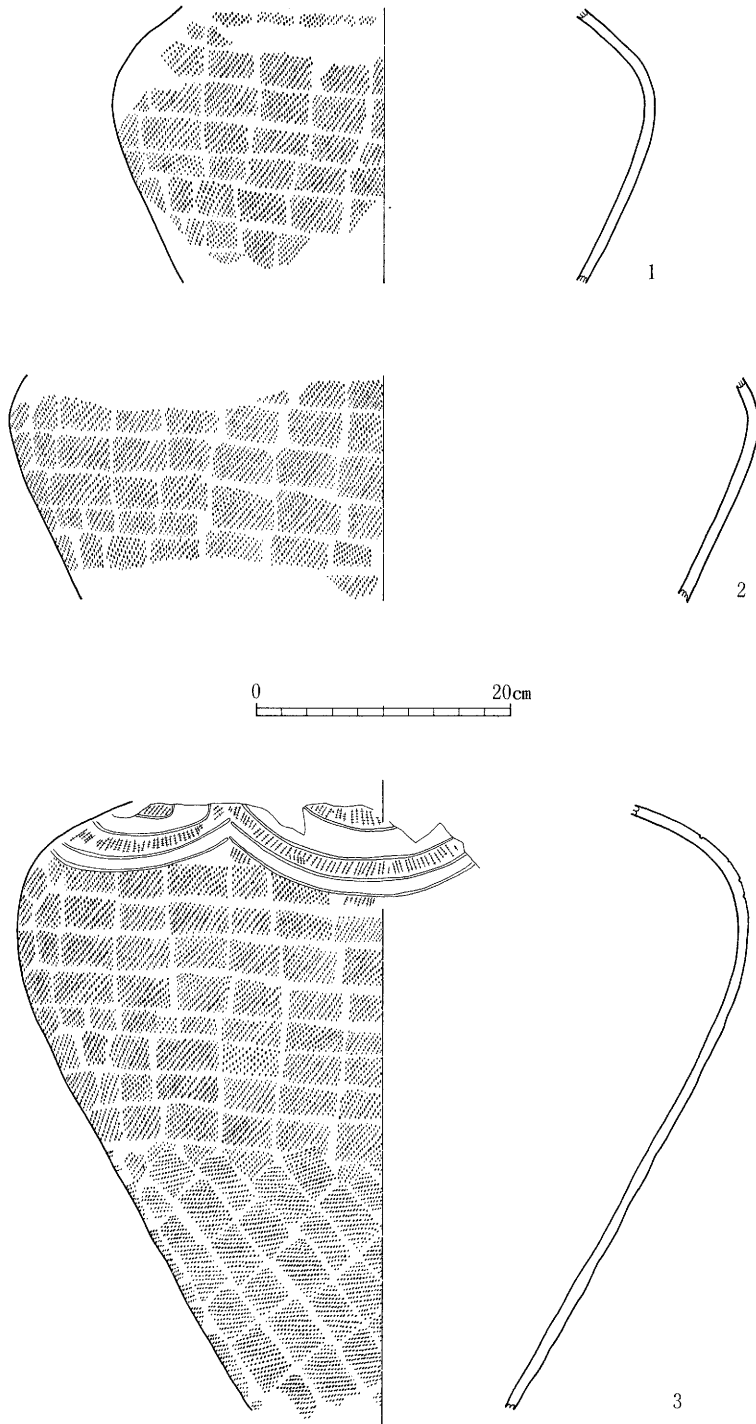
SM4 土器埋設遺構 A区南西側に位置する。長軸30cm、短軸25cm程の不整な方形の掘り方が遺存する。底面はほぼ平坦で壁はゆるやかに立ち上がる。掘り方埋土は他と同様に基本層Ⅳ層に類似する。土器の方向はE-4°-Sである。壺が2個体出土している。

Ⅳ. 出土遺物について

1. 弥生土器 (図13・14)

各遺構・基本層から数多く出土している。多くは破片資料で地文のみのものが大半を占める。図示可能な資料は土器棺と考えられる壺5点のみである。小破片であるが口縁部下部に刺突文をもつ甕の資料もみられる。

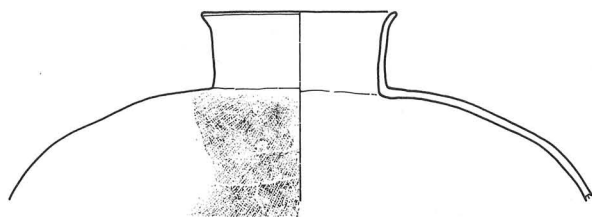
壺=欠損資料で全体を知るものはない。肩部幅から大型(60cm前後)と中型(40cm前後)に



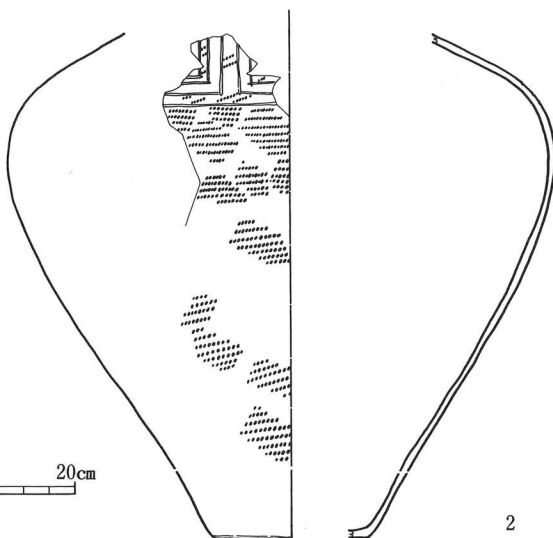
図版	出土地点・層位	器種	特 徴	享・図
1	S M 1 土器埋設遺構 底面	壺	L R 縄文、肩部最大幅 (426)、残存高220	
2	S M 2 土器埋設遺構 底面	壺	L R 縄文、肩部最大幅 (592)、残存高180	
3	S M 3 土器埋設遺構 底面	壺	肩部-同心円文・充填縄文-植物茎印彫文、体部-L R 縄文、肩部最大幅 (576)、残存高476	73-1

图13 出土遺物 1 (弥生土器 1)

() 内は推定値 単位:2mm



1



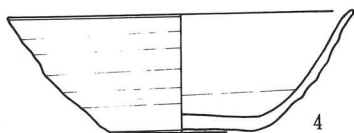
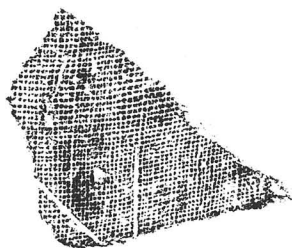
2



3



5



4

0 10cm

図版	出土地点・層位	種別・器種	特 徴	口径	底径	器高	芽・図
1	SM 4 土器埋設遺構	底面 弥生土器 壺	付加条縄文 (L R + R・R)、残存高148	(154)			
2	SM 4 土器埋設遺構	底面 弥生土器 壺	胴部一重方形文・充填縄文-付加条縄文 (L R + R・R)、体部-付加条縄文 (L R + R・R) 胴部最大幅 (430)、残存高398			120	
3	SD 16 溝跡	2層 土師器 坏	外面：ロクロ調整 底部一回転糸切り、内面：ヘタミガキ・黒色処理	139	45	41	73-2
4	SD 16 溝跡	2層 赤焼土器 坏	外面：ロクロ調整 底部一回転糸切り、内面：ロクロ調整	138	56	47	73-3
5	SD 9 溝跡	埋土 瓦 平瓦	凸面：縦走する縄印き目、凹面：やや粗い布目痕 (1cm内に約7×7本)、最大厚30				74-21

図14 出土遺物 2 (弥生土器 2・土師器・瓦)

() 内は推定値 単位12mm

分けられる。1・2・3は肩部から体部の資料でLR縄文が地文として施される。3は肩部に沈線による同心円文が描かれ、植物茎回転文による充填縄文が施される。内面は横位方向のミガキ状のナデがみられる。14-1は口縁部から体部上部の資料で口縁部はほぼ垂直に立ち上がり口唇部はかるく外反する。全面ヘラミガキ調整である。体部は地文としてLR+R・Rの付加条縄文が施される。2は体部から底部の資料である。地文としてLR+R・Rの付加条縄文が施され、肩部には沈線による重方形文が描かれ付加条縄文による充填縄文が施される。

所属時期は甕も含めてすべて柵形罎式期である。1～3次調査で出土した弥生土器の殆ども柵形罎式のものであり、今回出土の破片資料も当式期のものと推察される。

2. 土師器 (図14)

殆どが破片資料でロクロ使用 (B類) のものが大半を占める。ロクロ不使用 (A類) のものも確認されるが小破片で特徴等不明である。B類の器種として坏・甕が判断されるがA類同様詳細は不明である。なお、坏で底部が確認されるものは回転糸切りの無調整である。図示可能資料は3の坏1点である。底部から外傾気味に立ち上がり、口唇部でかるく外反をみる。ロクロ目の凸凹は浅い。内面は黒色処理・ヘラミガキが施される。底部は回転糸切り (時計回り) で無調整である。全体的に扁平で浅めの器形である。時期としては、3はSD16出土で県内でよく確認される灰白色火山灰の下部での出土であり、大きく10世紀前半頃と考えられる。他のB類土器は平安時代、表杉ノ入式期にとどめたい。A類は不明である。

3. 赤焼土器 (図14)

坏のみの確認である。図示資料は4の坏1点である。底部から外傾気味に立ち上がる。内面は外面に較べロクロ目も顕著でなく平滑である。底部は回転糸切り (時計回り) で無調整である。4はSD16出土で3と同伴関係にある。

4. 須恵器

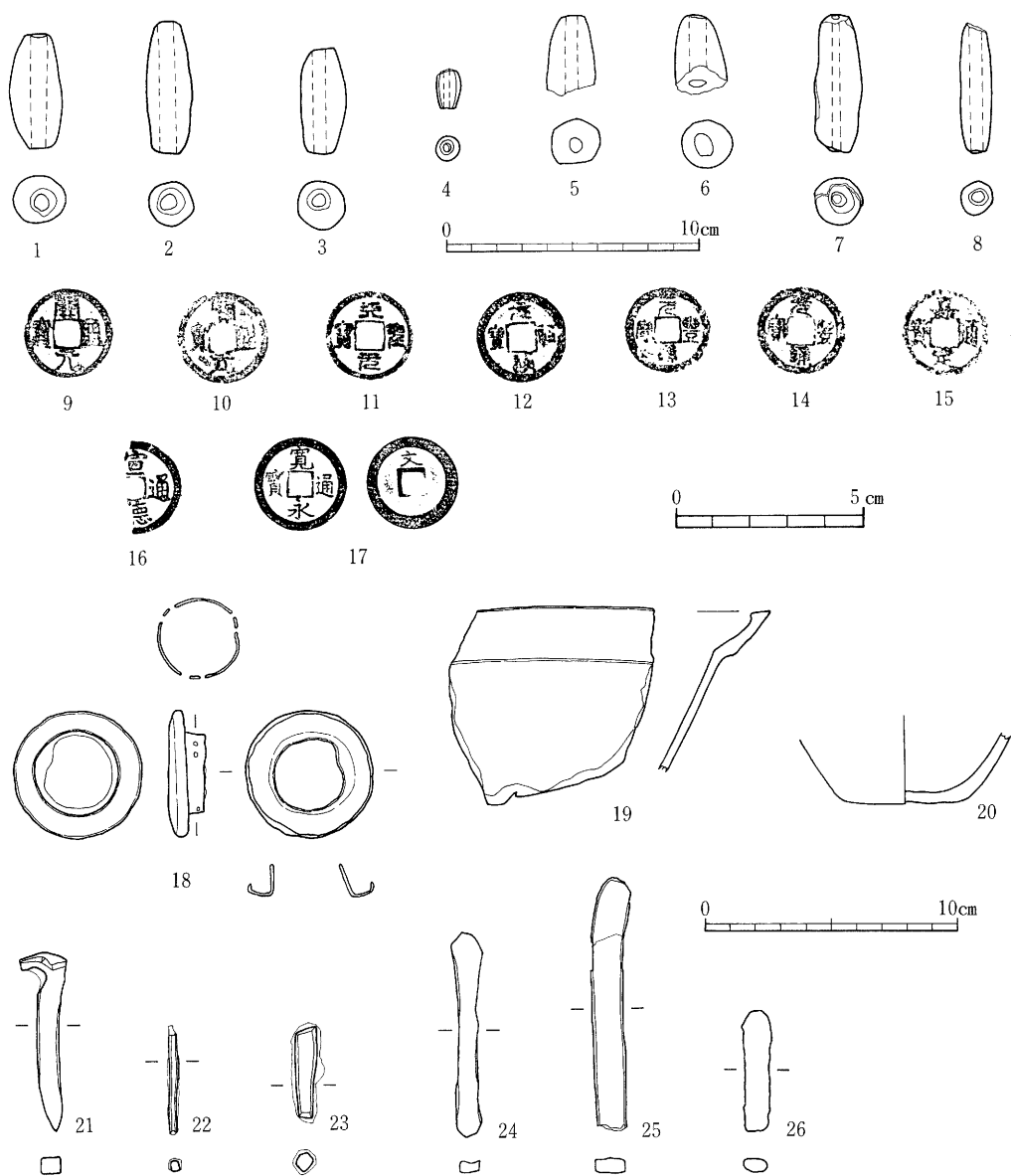
坏・甕の破片資料が確認されるが詳細は不明である。坏で底部切り離し技法が判明するものは回転糸切りである。甕には浅い波状沈線が描かれるもの、平行叩きの圧痕が観察されるものがある。

5. 瓦 (図14)

破片となった平瓦が少量出土している。5は凸面に縦走する縄目、凹面にやや粗い布目痕跡が観察される。瓦質は緻密で硬質である。最大厚は30mmを計る。基本層Ⅲ層及びSD5・8・9からの出土であるが攪拌・後世の流入と判断される。小片でもあり大きく平安期のものとしておきたい。

6. 土製品 (図15)

土錘=計8点ある。そのうち4点は完形品である。すべて端部先細りの棒状の円筒形を呈す



図版	出土地点・層位	種類	備考	字・図	図版	出土地点・層位	銭名	初鋳年	字・図
1	S K 7 土坑 1層	土罐	長さ46、幅19、孔径5、重さ14	74-5	14	調査区北 1層	元龜通宝(篆)	北宋 元龜元年(1078)	74-14
2	S K 12 土坑 埋土	土罐	長さ53、幅17、孔径6、重さ13	74-4	15	調査区北 P.79	嘉定通宝	南宋 嘉定元年~(1208~)	74-15
3	S K 12 土坑 埋土	土罐	長さ40、幅17、孔径5、重さ11	74-3	16	調査区北 II層	宣徳通宝	明 宣徳8年(1433)	74-16
4	S K 5 井戸 2層	土罐	横9、孔径3		17	S D 1-M溝跡 埋土	寛永通宝	江戸 寛永8年(1688) 正字文	74-17
5	S K 13 土坑 2層	土罐	幅19、孔径5		図版	出土地点・層位	種類	備考	字・図
6	調査区北 III層	土罐	幅19、孔径5		18	調査区北 II層	鋸り金具?	金銅製、外縁径51、留め穴計6ヶ	74-15
7	調査区北 III層	土罐	幅18、孔径4、やや硬質	74-2	19	S K 6 井戸 3層	鉄鍋	口縁部に段、厚さ2~3	74-16
8	調査区北 III層	土罐	長さ51、幅12、孔径5、重さ7	74-1	20	調査区北 P.71	鉄碗	底部径50、厚さ4~5	74-17
図版	出土地点・層位	銭名	初鋳年	字・図	21	調査区北 II層	釘	残存長71、幅8、厚さ6、釘頭有り	74-18
9	調査区北 III層	開元通宝(真)	唐 武徳4年(621)	74-9	22	S K 9 井戸 埋土	釘	残存長43、幅4、厚さ3	
10	調査区北 P.54	開元通宝(真)	唐 武徳4年(621)	74-10	23	調査区北 II層	釘	残存長37、幅6、厚さ6	
11	S D 5 溝跡 埋土	天聖元宝(篆)	北宋 天聖元年(1023)	74-11	24	S D 4 溝跡 埋土	鏝	残存長82、幅8、厚さ5	74-19
12	S D 8 溝跡 埋土	元祐通宝(篆)	北宋 元祐元年(1086)	74-12	25	調査区北 III層	鏝	残存長101、幅12、厚さ6	74-20
13	調査区北 P.101	元龜通宝(篆)	北宋 元龜元年(1078)	74-13	26	調査区北 III層	鏝	残存長48、幅9、厚さ5	

図15 出土遺物3 (土製品・金属製品)

単位:2mm、g

るが中央部の膨らみの有無で葉巻形と管形の2種に分けられる。長さは4～5cm程で径5mm程の孔が中心部を貫通している。重さは10±4g前後である。土師質であるがやや硬質のものも含まれる。4は中世のSK5、5は平安期のSK13出土である。

7. 金属製品 (図15)

銅製と鉄製のものがある。銅製品には飾り金具?・古銭があり、鉄製品には鍋・椀・釘・鏝がある。

飾り金具? = 1点ある。表面の一部に鍍金が残存し金銅製であることが理解される。外径50mm、内径30mm程を計る環状のものである。外縁端部は3mm程折り曲げられ、内側には長さ1cm程の円筒が接着され等間隔に二ヶ一對の留め穴が6ヶあけられている。地金の厚さは0.5mm程である。基本層Ⅲ層出土である。

古銭=計10枚出土している。唐銭2枚、北宋銭4枚、南宋銭1枚、明銭1枚、日本銭1枚、破片1枚がある。

鍋=口縁部付近の破片資料が1点ある。残存部から鉄鍋と考えた。体部から口縁部にかけて外傾気味に立ち上がる。口縁部は内外面に段をもち、内側は受け口状となる。口唇部は平口縁で内側端部は断面三角形状に肥厚する。厚さは2～3mmで上部につれて厚くなる。SK6出土である。

椀=1点ある。底部周辺の資料で底部径が5cm程で鉄椀と考えた。やや丸みをもち外傾気味に立ち上がる。厚さは4～5mm程である。ピット71出土である。

釘=図示資料は3点である。すべて欠損品である。21は折り曲げられた釘頭をもつもので残存長7cm程を計る。断面形はほぼ正方形で断面の大きさの違いから大小の2種が認められる。22はSK9、他は基本層からの出土である。

鏝=図示資料は3点である。板状となるもので基部等は存在しないが鏝の先端部と考えた。断面形は偏平な四角形である。25は残存長10cm程を計る。24はSD4、他は基本層出土である。

8. 石製品 (図16～18)

種類として砥石、円盤状の石製品、円礫、石鉢・臼・石製模造品がある。

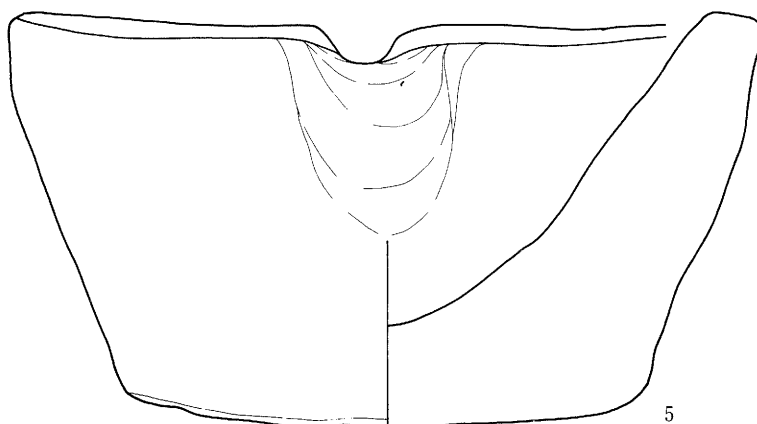
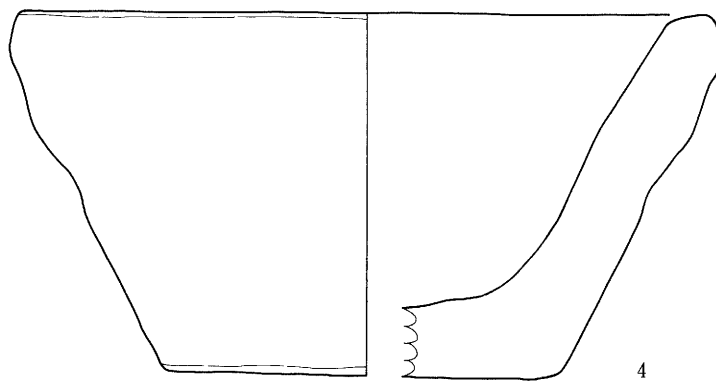
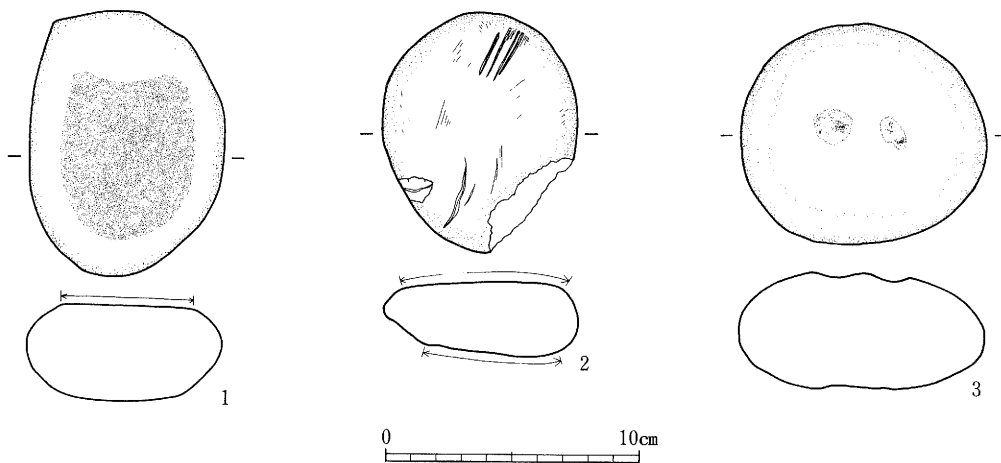
砥石=10点ある。両端部が確認されるものはない。砥面の使用頻度により形状が様々であるが、幅と厚さの比率から板状と棒状の2種に分けられる。砥石は板状が表裏の2面、棒状は面すべてである。擦痕及び大小の研磨溝がみられる。材質はすべて石英安山岩質凝灰岩である。中世の溝跡(SD1・5・8)およびSK6からの出土である。

円盤状の石製品=有孔のもの、破片の不明品各1点がある。11は偏平で不整な楕円形を呈する。加工痕は周縁部に浅い磨痕が認められる程度である。大きさは長軸66mm、短軸43mm、厚さ8mm程で石材自体しゅう曲している。孔は径5mm程で2ヶ有り、両面より穿孔されている。片面には浅い擦痕が縦横位にみられる。材質は石英安山岩質凝灰岩でやや軟質のものである。S



図版	出土地点・層位	種類	備考	寸・図	図版	出土地点・層位	種類	備考	寸・図
1	SD 1 溝跡 2層	砥石	板状、石英-石英安山岩質礫灰岩	75-7	7	SD 8 溝跡 5層	砥石	棒状、石英安山岩質礫灰岩	
2	SD 1 溝跡 4層	砥石	棒状、石英安山岩質礫灰岩		8	SK 6 井戸 3層	砥石	棒状、石英安山岩質礫灰岩	75-9
3	SD 1 溝跡 6層	砥石	棒状、石英安山岩質礫灰岩		9	SK 6 井戸 3層	砥石	棒状、石英安山岩質礫灰岩	
4	SD 1 溝跡 6層	砥石	棒状、石英安山岩質礫灰岩	75-10	10	調査区北	III層	砥石	棒状、石英安山岩質礫灰岩
5	SD 5 溝跡	埋土	板状、石英安山岩質礫灰岩	75-8	11	SD 8 溝跡 5層	有孔石製品	孔2ヶ、重さ16g、石英安山岩質礫灰岩	75-6
6	SD 5 溝跡	確認	棒状、石英安山岩質礫灰岩		12	調査区北	III層	不明石製品	筒縁両側に接、石英安山岩

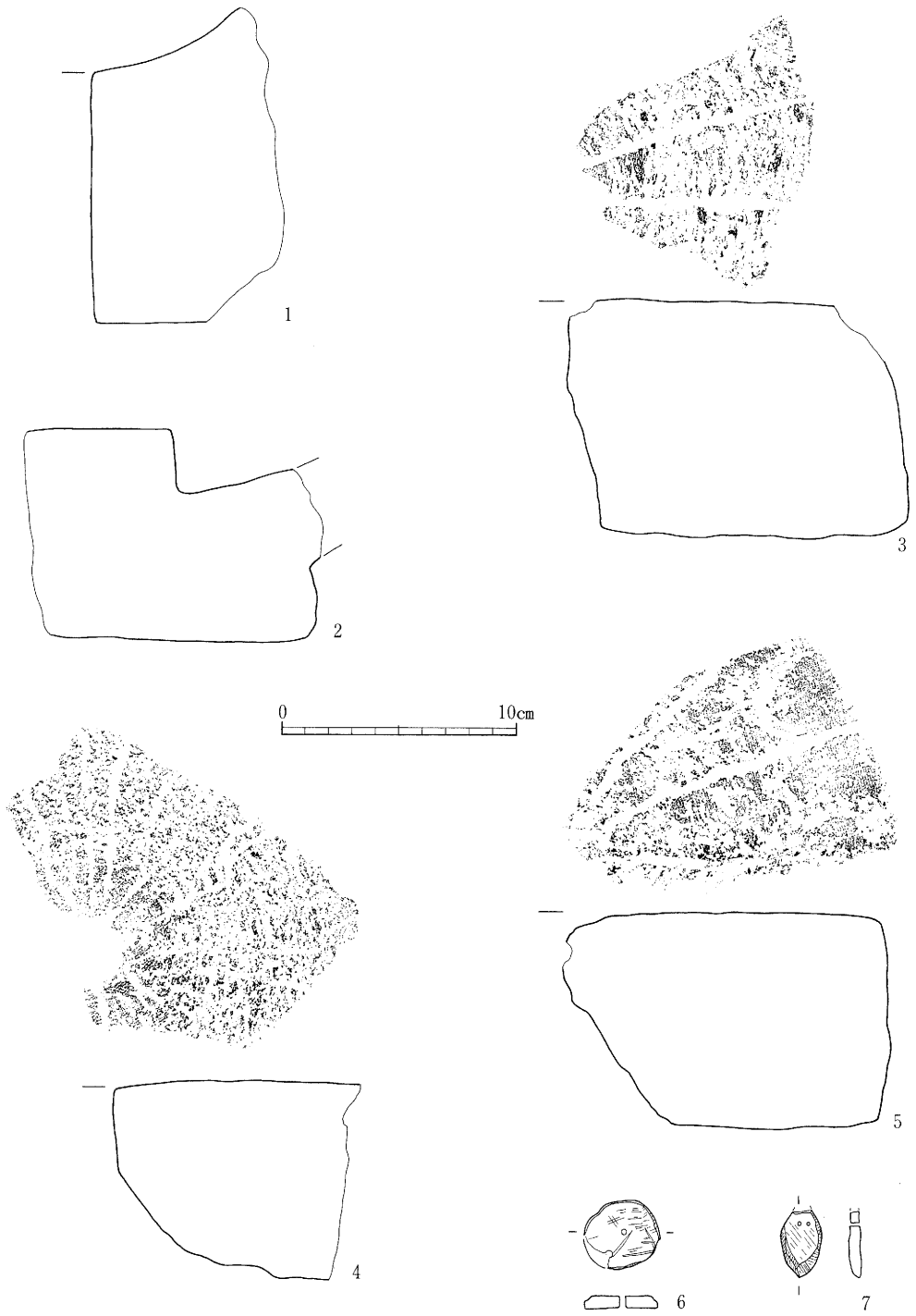
図16 出土遺物 4 (石製品 1)



図版	出土地点・層位	種類	備考	寸・図	図版	出土地点・層位	種類	備考	寸・図
1	S D 5 溝跡	埴土 円鏝	片面に平滑な磨面、重さ280、石質-石英安山岩	75-4	4	S D 1 溝跡	6層 石鏝	口径(277)、底径(155)、器高143、安山岩	
2	S D 2 溝跡	2層 円鏝	両面に磨面、残存重151、石英安山岩	75-5	5	S K 9 井戸	2層 石鏝	片口、口径298、底径206、器高163、安山岩	75-1
3	S D 1 溝跡	6層 円鏝	凹石、重3576						

() 内は排定値 単位:2mm、g

图17 出土遺物5 (石製品2)



図版	出土地点・層位	種類	備考	写・図	図版	出土地点・層位	種類	備考	写・図
1	S K 8 井戸 埋土	茶臼 上口	高さ135±σ、石質-安山岩	75-3	5	S K 9 井戸 2層	粉挽き臼 下臼	直径(306)、高さ92、安山岩	
2	S K 8 井戸 6層	茶臼 下臼	高さ89、上部径128、安山岩	75-2	6	調査区北	石製模造品	(門板) 径(32)、厚さ6	75-11
3	S K 8 井戸 6層	粉挽き臼 下臼	直径(320)、高さ100、安山岩		7	調査区北壁	石製模造品	(刺) 幅17、厚さ5、角閃石片岩	75-12
4	S K 8 井戸 6層	粉挽き臼 下臼	高さ84、安山岩						

() 内は推定値 単位:mm

図18 出土遺物 6 (石製品 3)

D 8 出土である。12は縁部付近の小破片で両面及び端部の一部が確認される。上下面は平坦で平滑に成形されており、縁端部は上下から整形され丸みをもった三角形状となる。全体的に滑面となっているが無数の擦痕・溝がみられる。円形とすれば推定径10cm程である。材質は石英安山岩である。基本層Ⅲ層出土である。

円礫= 3点ある。2点は磨石、他は凹石である。1は片面が摩面となり滑面の平坦面となっている。材質は石英安山岩である。SD 5 出土である。2は両面が磨面となるが全体的に浅い磨面で擦痕や溝が観察される。材質は石英安山岩である。SD 2 出土である。3は両面に凹みが見られる。SD 1 出土である。1・2は同質のもので磨面の状況・摩痕等から中世のものと考えられ、3は縄文ないし弥生時代のものと考えられる。

石鉢= 2点ある。4は口径28cm、底径16cm、器高14cm程を計る。ノミ様の凸凹の痕跡が内外面に残るが底面周辺は他に比べて摩滅がみられる。材質は安山岩である。SD 1 出土である。5は注ぎ口をもつ片口のものである。口径30cm、底径20cm、器高16cm程を計り全体的に器厚が厚い。ノミ様の痕跡が観察されるが全体的に器面は平滑である。口縁頂部から内面が磨られており、特に上半部は摩滅が顕著である。材質は安山岩である。SK 9 出土である。

臼= 図示資料は茶臼の上臼・下臼各1点、粉挽き臼の下臼3点である。すべて欠損品で特に周縁部は故意に打ち欠いた様に剥落しているものが多く、熱を受けたものススが付着しているものもある。全体的に臼面は摩滅しており、下臼はえぐりが大きい。材質は安山岩である。5はSK 9、他はSK 8 出土である。

石製模造品= 有孔円板1点、剣形1点が出土している。円板形のもは径32mm、厚さ6mmの扁平で不整形円形のものである。中央部分に2ヶの貫通孔をもつ。孔径は1.5mm程で一方向からの穿孔である。擦痕なども観察されるがやや粗雑な作りである。剣形品は基部が欠損している。基部付近に径1mm程の孔が2ヶある。一方向からの穿孔である。厚さは5mm程で表裏側面とも研磨され擦痕も観察されるが全体的に粗雑である。材質は角閃石片岩である。2点とも基本層からの出土であるが古墳時代中期のもの判断される。

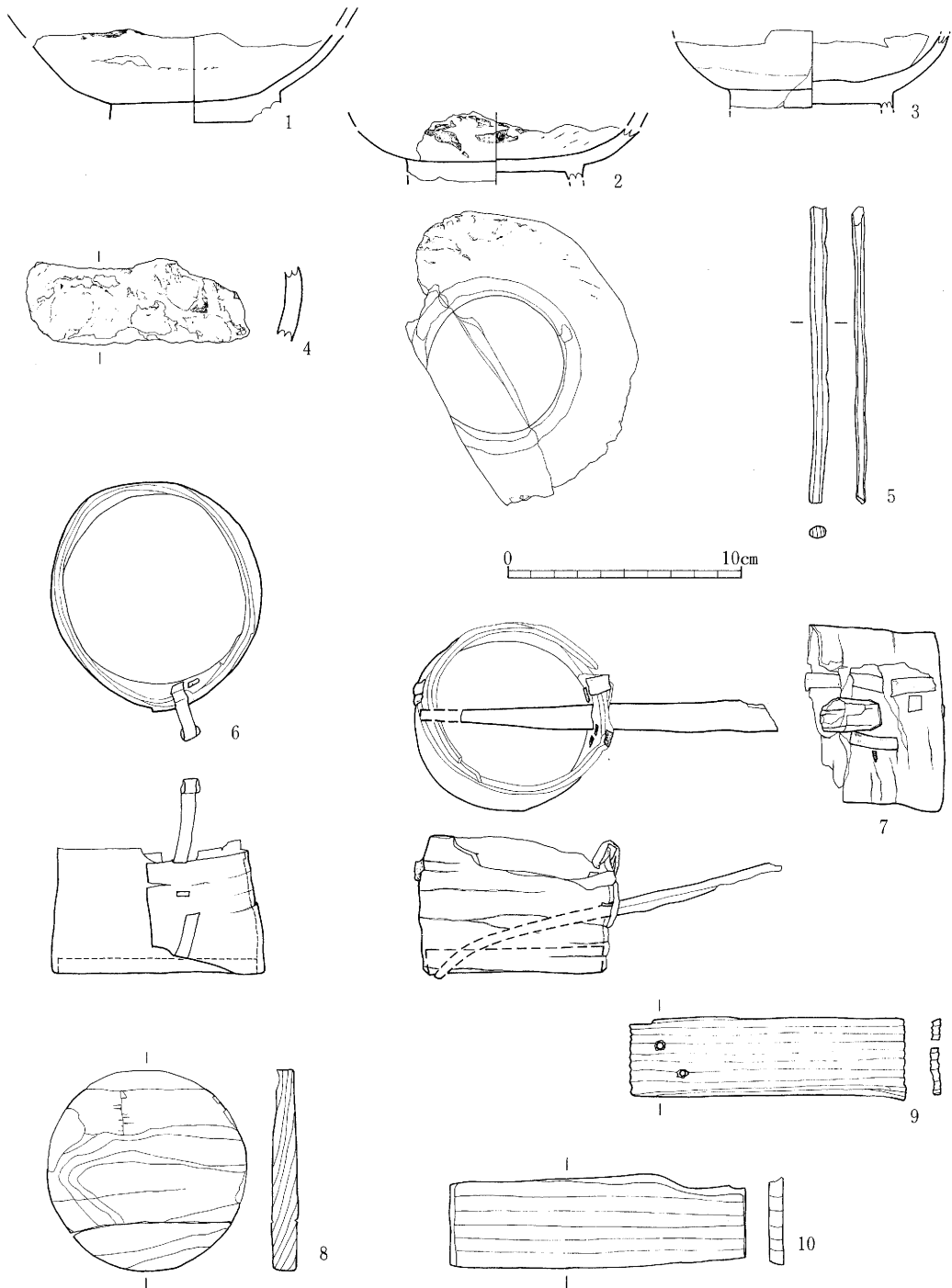
9. 木製品 (図19~21)

種類として椀・箸・柄杓・曲物・下駄・棒状木製品・板状木製品がある。

椀= すべて欠損品で全容を知り得るものはない。図示資料は4点である。底部が体部に較べて厚みをもちゆるく立ち上がるものと、器厚に差はなくきつく立ち上がる2種の器形が認められる。多くは内面が赤漆で、外面は黒漆に赤漆で文様が描かれる。文様は遺存がわるく葉文? または線状となっている。木取りはすべて横木取りと思われる。

箸= 1本確認した。長さ13cm程であるが、楕円形に面取りが施されており箸と判断した。

柄杓= 確認できたものは1ヶである。径7.5cm・厚さ1cm程の底板に、厚さ1mm程の側板を



図版	出土地点・層位	種類	備考	写・図	図版	出土地点・層位	種類	備考	写・図
1	SD 8 溝跡 5層	柄	高台径74、内外面一黒漆、赤漆部分的に残存		6	SK 8 土坑 6層	曲物	径91、高さ54、底板厚さ6	76-2
2	SD 8 溝跡 堀土	柄	高台径76、内面一赤漆、外面一黒漆・赤漆で兼文?		7	SK 9 土坑 2層	柄杓	径79、高さ60、底板厚さ10、柄あり	76-3
3	SD 8 溝跡 5層	柄	高台径70、内面一赤漆、外面一黒漆		8	SK 8 土坑 6層	曲物底板	径85、厚さ11	
4	SD 1 溝跡 6層	柄	内面一赤漆、外面一黒漆・赤漆で兼文?		9	SD 1-M 溝跡 3層	板状木製品	長さ117、幅35、厚さ4、穴2ヶあり	
5	SK 5 土坑 3層	管	残存長126、最大幅8、面取り、断面一楕円形		10	SD 1-M 溝跡 3層	板状木製品	長さ126、幅39、厚さ6	

図19 出土遺物7 (木製品1)

単位:1mm

二重ないし三重に巻き上げ、幅 8 mm程の桜皮でとじられている。残存高は 6 cmを計る。柄は先端を尖らせた竹材で側板から底板底面に貫通している。

曲物=形がほぼ確認されるものが 1 点あるが、他は底板・側板のみの欠損資料である。6 は柄杓と同型を呈するが、柄の貫通孔もなく桜皮の残存からしてやや深めの曲物と思われる。底板は径 8.5 cm・厚さ 6 mm程で側板は厚さ 1 mm程で二重に巻き上げられている。残存高は 54 mmである。他の底板は径が 9 cm・15 cm前後の 2 種が確認されている。側板の多くは欠損しているが高さ 12 cm以上を計る大型のものもみられる。

下駄= 5 点確認している。図示資料は 3 点である。形態的には長方形と長円形の 2 種があり、すべて有歯のもので連歯と差歯がある。確認されるものはすべて柾目材である。1 は長方形を呈する連歯のもので前方部が後部に較べやや幅広となる。長さ 23.2 cm、幅 9 cm、台板厚 1.2 cmを計るやや大きめのものである。歯はかなり擦り減っている。鼻緒後部の穴は後歯の後ろに位置し斜めから穿孔されている。鼻緒穴間は長さ 14.2 cm、幅 5.5 cmを計る。S D 1 - M出土である。2 は遺存が不良であるが長円形を呈する差歯のものである。歯部は確認されない。前方部には鼻緒穴が 1 ケみられ、後方に 2 ケ一對となる 16~18 mmの方形のほぞ穴がある。残存長 21 cm、幅 8.5 cm、台板厚 2.5 cmを計る。S D 1 出土である。3 は長円形を呈する連歯のもので長さ 19.6 cm、幅 9.6 cm、台板厚 1.2 cmを計る。鼻緒後部の穴は後歯の前に位置する。鼻緒穴間は長さ 9.5 cm、幅 6.9 cmを計る。S D 8 出土である。

板状木製品= 9・10 は柾目材のもので両端は切断面となる。9 には径 2 mm程の穴が 2 ケ穿孔されている。両者とも S D 1 - M出土である。20- 1 は上部が欠損するが下部につれて薄くなり篋状を呈する。2 は全体的に偏平で下部は切断面となっている。上部は摩滅のため丸くなっている。両者とも 4 面すべてに加工痕がみられる。S K 5 出土である。

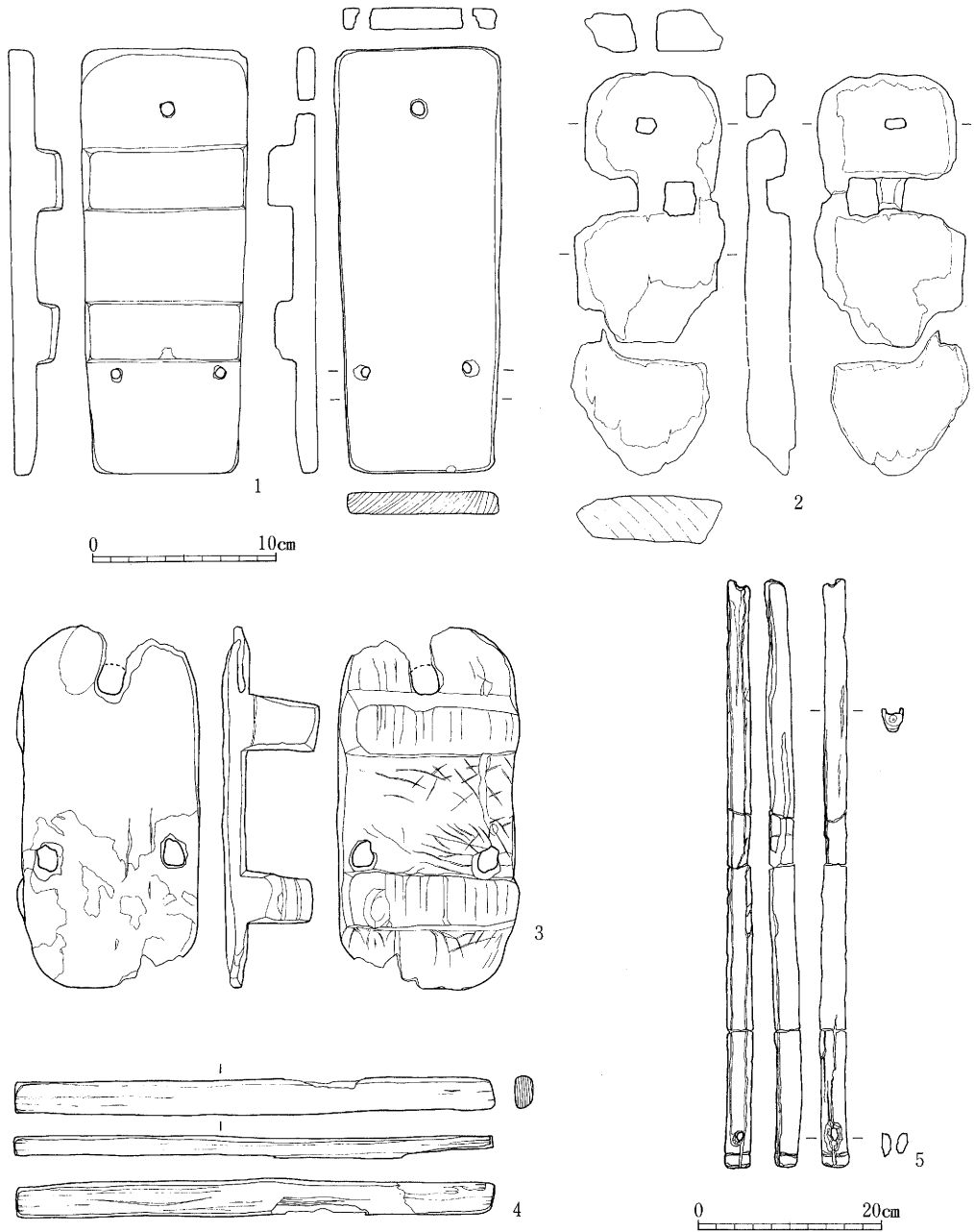
棒状木製品= 4 は右側が欠損するが左側は切断面となる。頂部が丸く整形され断面が楕円形となる。焦げ面が部分的に確認される。S D 8 出土である。5 は芯材上部を分割し平坦面にほぞ穴状の凹面を削り出した棒状のものである。ほぞ穴状の両端部には長円形となる穴が 1 ケずつ穿たれている。上端部は欠損するが下部が切断面となり、推定長 68 cm程と考えられる。下端部には 1 条の切り込みが巡っている。断面は U 字ないし逆三角形となる。S D 8 出土である。

10. 竹製品 (図 21)

有孔竹製品= 板状の小破片資料である。周辺部がすべて欠損しており本来の形状が推定不可能である。3 には径 2 mm程の穴が 2 ケ 2 段計 4 ケ穿たれている。S D - 1 M出土である。4 にも同様の穴が 1 ケみられる。S D 8 出土である。

11. 陶器 (図 22)

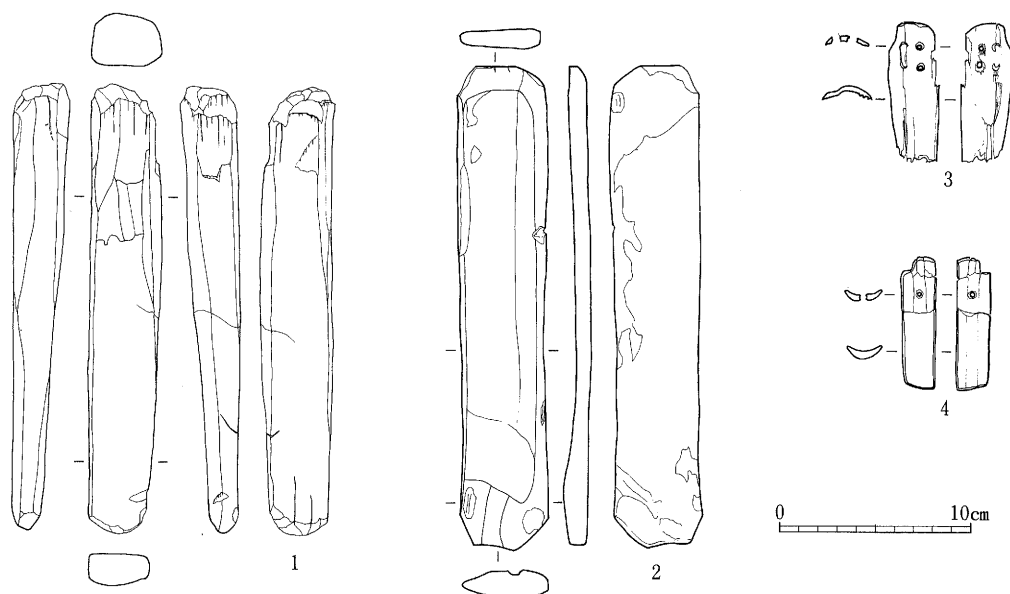
出土点数は 94 点である。ほとんどが破片資料で全体の器形を知り得るものは瀬戸・美濃の陶



図版	出土地点・層位	種類	備考	写・図	図版	出土地点・層位	種類	備考	写・図
1	SD 1-M溝跡 4層	下駄	長方形の遺物下駄、長さ232、幅90	76-5	4	SD 8溝跡 5層	棒状木製品	長さ252、幅20、断面-楕円形	
2	SD 1溝跡 6層	下駄	長円形の遺物下駄、長さ211以上、幅84以上		5	SD 8溝跡 埋土	棒状木製品	推定長さ678、幅24、中央部にほろ穴・貫通孔2ヶ、 両部に切り込み、断面-U形	76-1
3	SD 8溝跡 5層	下駄	長円形の遺物下駄、長さ196、幅96	76-4					

図20 出土遺物 8 (木製品 2)

単位:mm



図版	出土地点・層位	種類	備考	写・回	図版	出土地点・層位	種類	備考	写・回
1	S K 5 土坑 3層	板状木製品	長さ(235)、幅(38)、厚さ17~27		3	S D 1 - M溝跡 3層	板状竹製品	長さ(73)、幅(28)、厚さ3、孔2ヶ	
2	S K 5 土坑 3層	板状木製品	長さ254、幅45、厚さ8~12		4	S D 8 溝跡 埋土	板状竹製品	長さ(70)、幅(18)、厚さ4、孔1ヶ	

図21 出土遺物9 (木製品3・竹製品)

() は残存値 単位はmm

器碗1点のみである。産地が確認されるものには常滑・瀬戸・美濃・渥美・唐津・大堀相馬・堤・在地・岸窯系がある。

常滑 22点ある。甕17点・鉢1点・壺4点である。

古瀬戸 6点ある。梅瓶1点・平碗2点・皿1点・おろし皿?1点・鉢1点である。すべて灰釉のものである。5は灰釉平碗で口唇部がゆるく外反する。6は皿で内面にゆるい段をもち口縁部のみに釉がみられる。7はおろし皿と考えられ口縁部が平坦となり口唇部内面頂部が三角形形状に突起する。

美濃 2点ある。志野の鉢?1点・志野?の丸皿1点である。3は見込み部が平坦で鉢と考えた。高台径60mmを計る。薄灰色の釉が厚く見られる。

瀬戸・美濃 3点ある。天目茶碗1点・碗2点である。1は碗ではほぼ完形である。口縁部径110mm、高台径47mm、高台高10mm、器高70mmを計る。高台部を除く全面に薄鼠色の灰釉がみられる。見込みにトチン跡が3ヶ残る。4も碗で高台の高さがあるもので薄黄色となる灰釉が全面にみられる。高台径55mmを計る。

渥美 壺が2点ある。

唐津 2点ある。鉢1点・瓶1点である。

大堀相馬 4点ある。碗2点・土瓶2点である。

堤 5点ある。鉢3点・播鉢1点・不明品1点である。

在地産陶器 34点ある。甕29点・鉢2点・播鉢1点・壺1点・小壺1点で、そのうち白石窯の甕20点・鉢1点・小壺が含まれる。9は白石窯と思われる甕で口縁部が受け口状で口唇部が上方に丸く三角に尖る。

岸窯系陶器 播鉢が6点ある。すべて鉄化粧である。8は外面上部に鉄釉がかけられ内面には8条を単位とする櫛目が縦位にみられる。

産地不明 8点ある。2は碗で高台下部を除き灰釉が全面にみられる。胎土は緻密で鼠色を呈する。高台径54mm、高台高8cmを計る。10は無釉の鉢で口縁部が外方にきつく折れ曲り頂部が平坦となる。その他として縁釉陶器碗の破片が1点ある。

12. 磁器 (図22)

出土点数は26点である。産地が確認されるものには肥前・瀬戸・美濃・中国がある。

肥前 染付と白磁がある。染付には皿5点・鉢1点・蓋1点・瓶1点、不明品2点があり白磁は瓶1点である。12は白磁の瓶で外面に薄黄灰色の釉がみられる。高台径97mm、高台高13mmを計る。大徳利とも考えられる。

瀬戸・美濃 染付の皿が1点ある。

中国 染付・青磁・白磁がある。染付には皿3点・碗1点、青磁は碗2点、白磁は皿1点・碗3点である。11は白磁の碗で内面に横方向の文様がみられるが不明である。胎土は灰白色でやや軟質である。

13. 土師質土器 (図22)

資料点数は9点で皿2点・鉢5点・播鉢2点である。

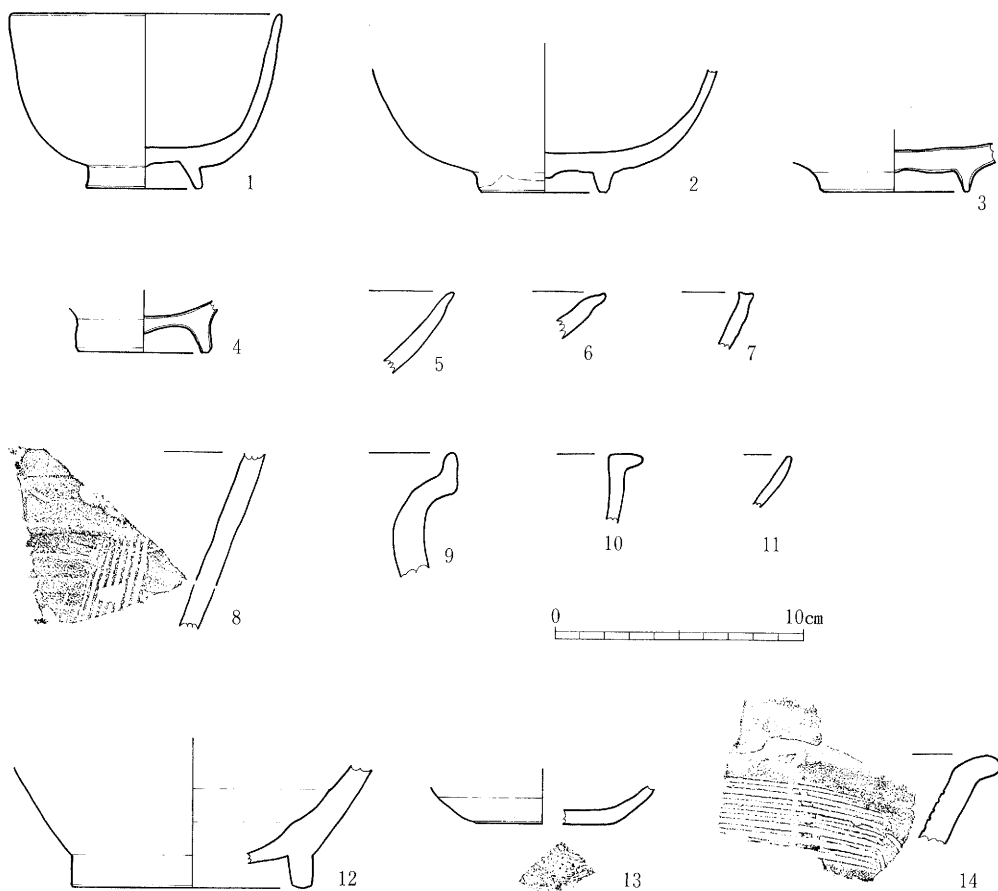
皿はいわゆる「かわらけ」と称するものである。2点とも小振りのもので底部に回転糸切り痕が見られる。軟質と硬質がある。13は器厚が薄くやや軟質である。底部径56mmを計る。

鉢は口縁部資料4点・体部資料1点である。口縁部資料には短く外反し丸くおさまるものと直立気味に立ち上がり端部が平坦になるものがある。2次焼成をうけ赤化しているものがある。すべて硬質である。

播鉢は口縁部資料である。14は口縁部が短く外反し丸くおさまる。口縁下部に横位方向の櫛目が巡り、下部に縦位の櫛目が施されるようである。2点とも火熱のため赤化している。硬質である。

14. 瓦質土器

1点のみの確認である。体部破片であるが小壺と思われる。外面は黒色を呈し、横位方向のミガキ状のナデが施され滑面となっている。ロクロ成形で硬質である。



図版	出土地点・層位	種別・器種	産地	備考	写真・図
1	SD1-M溝跡 埋土	陶器 碗	瀬戸・美濃	灰釉、口径110、器高70、高台径47、ほぼ完成	73-4
2	調査区北	陶器 碗	不明	灰釉、高台径54	73-5
3	SD1-M溝跡 埋土	陶器 鉢?	美濃	灰釉、志野、高台径60	73-6
4	SD1-M溝跡 埋土	陶器 碗	瀬戸・美濃	灰釉、高台径55	73-7
5	SD8溝跡	陶器 平碗	古瀬戸	灰釉、口縁部ゆるく外反	73-8
6	調査区北	陶器 皿	古瀬戸	灰釉、内面にゆるい段	
7	調査区北	陶器 おろし皿	古瀬戸	灰釉、口縁頂部平坦	
8	SD1-M溝跡	陶器 擂鉢	岸窯系	鉄化椀、外面上部に鉄釉、8条単位の横目	73-9
9	SD1溝跡	陶器 鉢	白石窯?	口縁部受け口状	
10	調査区北	陶器 鉢	不明	口縁部外方にきつく折れ曲がる	
11	SK6井戸跡	白磁 碗?	中国	胎土やや軟質	73-10
12	SD1溝跡	白磁 瓶	肥前?	灰釉、高台径97、徳利?	73-11
13	SK5井戸跡	埋土 土師質土器 皿		かわらけ、底部径56、回転糸切り、やや軟質	
14	調査区北	埋土 土師質土器 擂鉢		口縁部短く外反、横位方向に横目	73-12

図22 出土遺物10 (陶器・磁器・土師質土器)

単位12mm

出土地点	種別・器種	部位	産地	年代	備考	図・番	写・番
SD1-M埋土	陶器 碗	ほぼ完形	瀬戸・美濃	18c	灰釉	22-1	73-4
M埋土	陶器 鉢?	高台部~底面	美濃	16c末~17c初	志野	22-3	73-6
M埋土	陶器 碗	高台部~底面	瀬戸・美濃	17c~18c	灰釉	22-4	73-7
M埋土	陶器 擂鉢	体部	岸窯系	17c	鉄化粧 鉄釉 櫛目		
M2層	陶器 甕	体部	白石窯	13c後半~14c前半			
M3層	陶器 擂鉢	体部	岸窯系	17c	鉄化粧 鉄釉	22-8	73-9
SD1 確認	陶器 鉢	口縁部	堤	19c	なまこ釉 ※③		
確認	陶器 擂鉢	体部	岸窯系	17c	鉄化粧 櫛目		
埋土	白磁 皿	口縁部	不明				
埋土	陶器 擂鉢	体部	岸窯系	17c	鉄化粧 櫛目		
埋土	磁器 皿	口縁部~体部	肥前	17c中~後半	染付 口縁口錆		
2層	磁器 碗	口縁部~体部	不明	19c以降	イッチン手法		
2層	磁器 皿	体部	肥前	18c	染付		
2層	陶器 甕	体部	常滑	中世			
2層	陶器 擂鉢	体部	堤	18c以降	鉄釉 櫛目		
4層	陶器 甕	口縁部~体部	白石窯?	13c後半~14c前半		22-9	
4層	陶器 甕	体部	白石窯?	13c後半~14c前半			
4層	陶器 甕	体部	在地	13c後半~14c前半			
4層	白磁 瓶	体部~高台部	肥前?	江戸以降	徳利?	22-12	73-11
6層	青磁 碗	高台部	中国	12c~13c	劃花文?		
6層	土師土器 鉢	口縁部		16c~17c			
SD2 埋土	陶器 壺?	体部	常滑	中世			
1層	陶器 甕	体部	白石窯	13c後半~14c前半			
2層	陶器 壺?	体部	常滑	中世			
底面	陶器 擂鉢	口縁部	在地	13c後半~14c前半	片口 櫛目 ※②		
SD4 埋土	陶器 甕	体部	常滑	中世			
埋土	陶器 甕	体部	常滑	中世	自然釉		
埋土	陶器 鉢	体部	唐津系?	18c以降	ハケメ文		
埋土	陶器 碗	体部~高台部	大堀相馬?	18c	淡青色釉の碗		
埋土	磁器 鉢?	底部~高台部	肥前	江戸	染付 筒形 ※①		
埋土	磁器 皿	口縁~高台部	不明	明治	銅板転写 染付 口錆		
1層	磁器 皿	体部	肥前	17c	型押し 輪花染付皿		
1層	陶器 碗	体部	大堀相馬	18c?	灰釉		
2層	陶器 甕	体部	白石窯?	13c後半~14c前半			
2層	磁器 皿	口縁~高台部	肥前	18c	染付		
2層	陶器 天目茶碗	体部	瀬戸・美濃	中世			
3層	陶器 甕?	体部	常滑	中世			
3層	陶器 甕	体部	白石窯?	13c後半~14c前半			
3層	白磁 皿	体部	中国	16c?			
3層	磁器 皿?	体部	中国	16c	染付		
SD5 埋土	陶器 壺?	体部	渥美	12c~13c			
埋土	陶器 鉢	口縁部	在地	13c後半~14c前半			
埋土	陶器 甕	体部~底部	白石窯?	13c後半~14c前半			

表1 陶器・磁器類観察表1

出土地点	種別・器種	部 位	産 地	年 代	備 考	図・番	写・番
SD5	埋土 陶器 甕	体部	白石窯	13c後半~14c前半			
	埋土 陶器 甕	体部	白石窯	13c後半~14c前半	自然釉		
	埋土 緑釉陶器 碗	体部	不明				
SD8	埋土 陶器 梅瓶	体部	古瀬戸	14c?	灰釉		
	1層 瓦質土器 小壺	体部		中世			
	4層 陶器 甕	体部	在地	13c後半~14c前半			
	4層 陶器 甕?	体部	在地	13c後半~14c前半			
	4層 陶器 甕	体部	常滑	中世			
	5層 陶器 壺?	体部	在地	13c後半~14c前半			
	5層 陶器 甕	体部	白石窯?	13c後半~14c前半	漆継		
	5層 陶器 甕	体部	常滑	中世			
	5層 陶器 甕?	体部	在地	13c後半~14c前半			
	5層 陶器 甕?	体部	常滑	中世			
	5層 陶器 甕?	体部	常滑?	中世			
	5層 陶器 甕	体部	在地	13c後半~14c前半			
	5層 陶器 鉢	体部~底部	常滑?	中世	内面磨面 田土使用?		
	5層 陶器 平碗	口縁部	古瀬戸	15c	灰釉	22-5	73-8
	5層 陶器 鉢?	体部	古瀬戸	15c?	灰釉大形の鉢		
SD10	1層 陶器 鉢?	体部	白石窯?	13c後半~14c前半			
SK5	埋土 土師質土器 皿	体部~底部		中世	かわらけ 回転糸切り	22-13	
	1層 陶器 甕	体部	常滑	中世			
	1層 陶器 甕	体部	常滑	中世			
	2層 陶器 甕	体部	常滑	中世			
	3層 陶器 甕	体部~底部	白石窯?	13c後半~14c前半			
	3層 陶器 壺	体部	渥美	12c~13c			
	3層 白磁 碗	体部	中国	中世			
SK6	3層 白磁 碗?	口縁部	中国			22-11	73-10
	3層 陶器 甕	体部	白石窯?	13c後半~14c前半			
SK7	1層 土師質土器 鉢	体部		中世?			
SI1	1層 陶器 甕	体部	常滑	中世			
基本層	Ⅲ層 陶器 甕	体部	白石窯	13c後半~14c前半	断面に磨面		
	陶器 甕	体部	白石窯	13c後半~14c前半			
	陶器 甕	底部	白石窯	13c後半~14c前半			
	陶器 甕	体部	白石窯	13c後半~14c前半			
	陶器 小壺	底部	白石窯?	13c後半~14c前半			
	陶器 甕	体部	在地	13c後半~14c前半			
	陶器 甕	体部	在地	13c後半~14c前半	断面に磨面		
	陶器 甕?	体部	在地	13c後半~14c前半			
	陶器 甕	体部	常滑	中世			
	陶器 甕	体部	常滑	中世	自然釉		
	陶器 甕	体部	常滑	中世			
	陶器 鉢	口縁部	不明	中世?		22-10	
	陶器 瓶?	体部	唐津	16c末~17c初	灰釉		

表2 陶器・磁器類観察表2

出土地点	種別・器種	部位	産地	年代	備考	図・番	写・番
基本層 III層	陶器 播鉢	体部	岸窯系	17c	鉄化粧 櫛目		
	陶器 碗	体部～高台部	不明	18c～19c	灰釉	22-2	73-5
	陶器 鉢?	口縁部	不明	19c	鍋類?		
	陶器 土瓶	体部	大堀相馬	19c			
	陶器	口縁部	不明				
	磁器 瓶?	体部	肥前	近世	染付		
	磁器	体部	肥前	近世			
	土質土器 皿	底部		中世	かわらけ 大型の皿		
	土質土器 鉢	口縁部			赤化		
基本層 II層	陶器 皿	口縁部	古瀬戸	15c～16c	灰釉	22-6	
	陶器 壺?	体部～底部	常滑	中世			
	陶器 甕	体部	不明	中世			
基本層 I層	陶器 甕	体部	白石窯	13c後半～14c前半			
	陶器 甕	体部	白石窯	13c後半～14c前半			
	陶器 甕	体部	白石窯?	13c後半～14c前半			
	陶器 甕	体部	在地	13c後半～14c前半			
	陶器 おろし皿?	口縁部	古瀬戸	13c～14c	灰釉	22-7	
	陶器 平碗	体部	古瀬戸	15c	灰釉		
	陶器 甕	体部	常滑	中世			
	陶器 甕	体部	常滑	中世			
	陶器 丸皿	口縁部～体部	美濃	16c末～17c初	志野?		
	陶器 播鉢	体部	岸窯系	17c	鉄化粧 櫛目		
	陶器 播鉢	口縁部	不明	17c	鉄釉 櫛目		
	陶器 土瓶	体部	大堀相馬	18c～19c			
	陶器 鉢	体部	堤	19c			
	陶器 鉢	底部～高台部	堤	19c			
	陶器	体部	堤	近世	鉄釉		
	陶器 鉢?	口縁部	不明	江戸			
	磁器 碗?	体部	中国	16c前半	染付		
	磁器 皿?	体部	中国	16c後半			
	磁器 皿?	体部	中国	16c	火熱を受ける		
	磁器 皿	底部	肥前	18c	染付 印版の五弁花		
	磁器 蓋	口縁～上半部	肥前	18c以降	染付		
	磁器	体部	肥前	近世	染付		
	磁器 皿	体部	瀬戸・美濃	19c後半	染付		
	磁器 碗	口縁部	不明				
	青磁 碗?	体部	中国	13c～14c	無文碗		
	白磁 碗?	体部	中国	16c			
	土質土器 播鉢	口縁部		16c～17c	櫛目	22-14	73-12
	土質土器 播鉢	口縁部～体部		16c～17c	赤化 櫛目		
	土質土器 鉢	口縁部		16c～17c			
	土質土器 鉢?	口縁部		江戸前半			
壁面	陶器 壺	体部	常滑	中世			
側溝部	陶器 甕	体部	白石窯	13c後半～14c前半			

表3 陶器・磁器類観察表3

Ⅶ. 総括とまとめ

1. 遺構の構成

弥生時代から近世までの遺構を検出している。主題となるものは中世の遺構であるが、他の時代の遺構も数少ないが確認されている。

(1) 弥生時代

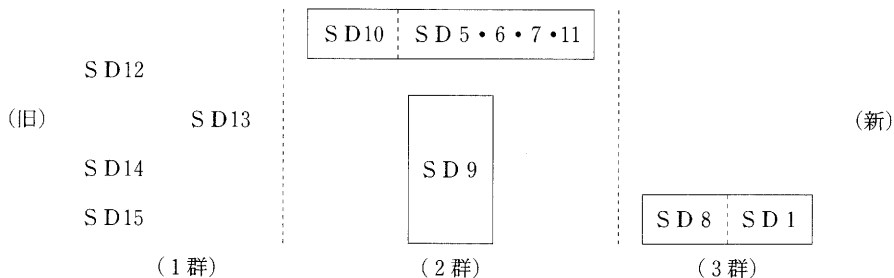
土器埋設遺構を4基確認している。SM1は遺存が特に不良であったが、検出状況からすべて土器棺墓と判断した。時期はすべて埴形冢式期である。第3次調査においても同式期の土器棺墓を1基確認しており、当遺跡内において計5基の土器棺墓が確認されたことになる。基本層及び他時期の遺構から小片となった多量の土器は出土するが、遺構は79年の調査で埴形冢式期の土坑が1基確認されているのみである。後世の攪乱も原因と考えられるが未だ不明な点が多い。

(2) 平安時代

SD16溝跡・SK13土坑がある。両者とも直線的に延びるもので、堆積土内より土器とともに灰白色火山灰が確認され、大きく10世紀前半の年代が考えられる。軸方向は真北に対しほぼ直角ないし並行となっている。第3次調査で確認されたSD17も同様の特徴をもち、一連の遺構と判断される。遺構ごとの断続的な確認であるが、真北を基準とした規格に沿った区画の溝と考えられる。

(3) 平安時代以降～中世

各遺構の重複関係を主に、方向性、出土遺物から大きく3群に分けた。なお、溝跡に着目した直接的な重複関係は下記となる。



1群 SD12・14・15溝跡、SD13溝跡がある。前者は調査区中央部の溝跡の中で最も古い段階のものである。ほぼ等間隔で並行する3条の溝跡群である。SD13はSD12より新しくなる単体遺構である。両者とも性格・時期不明である。

2群 SD10・5・6・7・11溝跡とSD9溝跡がある。前者の遺構は単体で存在し位置的にも離れているが方向・規模から一つのグループと判断した。中心となるSD5はa・b・c

遺構名	地点	時期・群	規模	上端幅	下端幅	深さ	断面形	方 向	備 考
SD1	H	中世 3群	大型	(730)		150			底面大小の凹凸面となる、SD2を切る
-M1	H	近世	中型	(150)		35	皿形		SD1の3層面で確認
2	G	中世	中型	200	60	50	逆台形・皿形	不定	埋め戻されている
3	G	中世 3群							SD8の西南部と考えられる
4	A~E	近世~	中型	120	30	40	逆台形	N6°E	すべての遺構を切る
5a	B	中世 2群	中型	90	50	45	逆台形	N88°E	テラス部の幅230、SD5bを切る
5b	B	中世 2群	中型		35	30	逆台形	E1°S	SD5cを切る
5c	B	中世 2群	中型		50	30	逆台形	E2°S	
6	A	中世 2群	小型	40	20	16	逆台形	N75°E	直角に取り付く小溝あり
7	A	中世 2群	小型	35	20	15	U字形	N74°E	直角に取り付く小溝あり
8	E・F	中世 3群	大型	1160	990	90			大小の土手状の高まり、SD9・SI2を切る
9	C~E	中世 2群?	小型	90	40	30	逆台形	N7°E	北側に屈曲部あり
10	C・D	中世 2群	小型	20	10	10	U字形	N5°W	北側部でSD11が取り付く、SD12を切る
11	C	中世 2群	小型	20	15	6	U字形	N76°E	
12	C	中世? 1群	小型	50	25	10	皿形	N48°E	SD14・15と同方向
13	D	中世? 1群	小型	20	15	6	皿形	E7°S	
14	D	中世? 1群	小型	30	15	8	皿形	N54°E	SD12を切る
15	D	中世? 1群	小型	40	20	10	皿形	N50°E	
16	B	平安時代	小型	60	40	25	逆台形	N88°E	灰白色火山灰を含む
遺構名	地点	時期・群	平面形	断面形	大 き さ	備 考			
SK1	A	—	不整な長方形	逆台形・皿形	370×80×28				
2	A	—	隅丸長方形	U字形	106×22×18				
3	A	—	円形	長方形	75×70×20	人為堆積			
4	A	—	不整形	長方形	95×85×30				
7	A	中世	不整形	方形?	(205)×145×4	SD6・SI1を切る			
10	C	—	不整三角形	逆台形	100×35				
11	C	—	円形	楕円形	60×55×25				
12	D	—	円形?	—	推定径70	井戸跡?			
13	A・B	平安時代	長方形	長方形	320×75×20	溝跡?、灰白色火山灰を含む			
遺構名	地点	時期・群	平面形	断面形	大 き さ	備 考			
SK5	A	中世 2群?	円形	長方形	155×135×270	井戸跡、SD6・SD7・SM2を切る			
6	A	中世 2群?	円形	長方形	90×85×290	井戸跡、SD6南側部の小溝を切る			
8	D	中世?	円形	長方形	115×110×225	井戸跡、SD9を切る			
9	D	中世?	円形	長方形	140×140×210	井戸跡、SD10・13・14を切る			
遺構名	地点	時期・群	平面形	大 き さ		備 考			
SI1	A	中世 2群?	隅丸の方形?	西辺500まで確認、壁高18		西側部に周溝状の落ち込みが巡る			
2	D・E	中世 2群	方形	東辺260、北辺145まで確認、壁高5		SD9・15を切る			
遺構名	地点	時期・群	平面図	大 き さ		備 考			
火葬遺構	C	中世 2群	長円形(残存)	長軸40、短軸15、深さ15	炭化物・焼土・骨片あり、SD9を切る				
遺構名	地点	時 期	特 徴			備 考			
SM1	A	弥生時代(柵形囲式期)	壺の小破片			土器棺墓?			
2	A	弥生時代(柵形囲式期)	壺1個体のみ確認、円形の掘り方、方向(底部一口縁部)はN70°E			土器棺墓			
3	A	弥生時代(柵形囲式期)	壺1個体のみ確認、円形の掘り方、方向はE34°S			土器棺墓			
4	A	弥生時代(柵形囲式期)	壺2個体を確認、不整形の掘り方、方向はE4°S			土器棺墓			

表4 検出遺構観察表

単位はcm

に分れる3条の溝跡であるが位置・規模・方向が同じであり同一の性格をもつと考えられ、SD 6・7・10・11がほぼ直角・並行に取り付く方面な配置をもつ遺構群と考えられる。これらの形態は第3次調査の4期1 a・1 b群と同様であり、一連の遺構群と判断できる。さらに、SD 5は第3次調査のSD 4・8に規模・断面形態が類似し、位置的にも延長線上にあり、同じ溝跡と考えられる。時期は13~14世紀頃と思われる。SD 9は北西部にコーナーがみられ東側に展開をみる方形を基調とする区画の溝跡と考えられる。中世と判断される出土遺物はないが、溝北側で火葬遺構に切られている。第3次調査で火葬遺構・焼骨出土地点が確認され4期2群に位置づけている。3群のSD 8には先行するものであり、時期は大きく15世紀頃のものと考えておきたい。

3群 SD 8・SD 1 溝跡がある。SD 1・SD 8は溝間に直接的な関係はみられないが、堆積土上部に基本層Ⅳ層を主体とする一方向からのレンズ状を呈する黄色土が共通に確認され

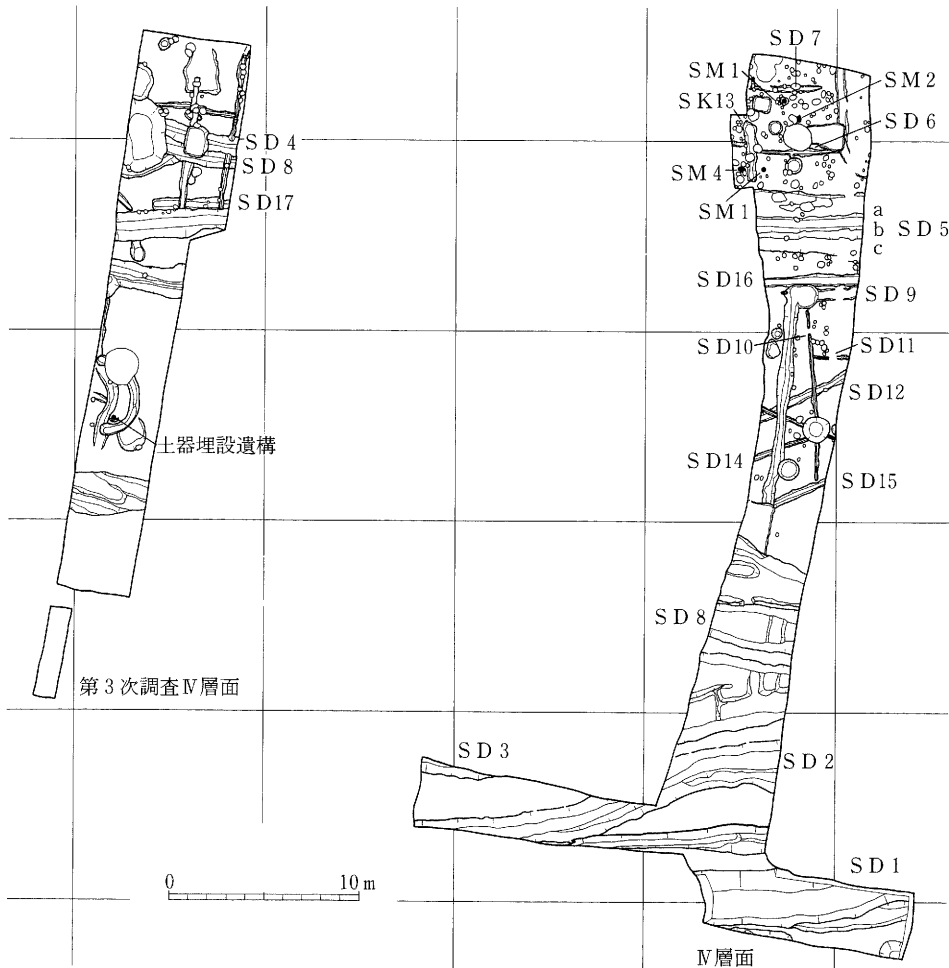


図23 Ⅳ層面確認遺構合成図

ている。さらに両溝の中間に位置するSD2は同様の黄色土で埋め戻されている。このことは中間部分に土塁が構築されていたと考えるのが妥当と思われ、レンズ状の黄色土は土塁の崩壊土と考えられる。この点からSD1・SD8は同時期での機能が確認される。なお、SD1はSD2を切っており土塁はSD1構築時のものと考えられる。土塁を含めた溝幅は南北が20mを越える極めて大きなものとなる。なお、第3次調査で外堀と判断したSD11が北西側に位置している。部分的な確認であるため形態等不明な点はあるが、位置的にみてSD8に続くものと判断される。時期は15・16世紀頃と思われる。

(4) 近世

SD1-M・SD4溝跡がある。両者とも東西・南北方向に直線的に延びている。周辺状況からみて水田に関する水路跡とも考えられるが詳細は不明である。

以上が大きく4時期に分けた遺構の構成となるが、土坑・井戸跡等は時期の決めてとなる遺物や重複関係がなく所属時期が不明となるものが多い。特に土坑は古代の土器が出土するが流入遺物の可能性もあり不明とした。

2. 外堀跡について

3群に位置づけたSD8・SD1溝跡は前述の点から判断して城館を区画する南辺部の外堀跡と考えられる。部分的な確認であるため広がり等不明な点が多いが、SD8は東端が狭くハの字状となり、SD1は北東側へゆるい屈曲をもち、溝間中央部の土塁部分は幅5m前後を計るゆるい蛇行面となる。自然地形利用のためか、堀自体不整形な形状となっている。第3次調査確認のSD11溝跡はSD8に続くものと考えたが、SD11の北側に並行して延びるSD1溝跡がある。2条の単体の溝跡と判断していたが、SD8底面状況・SD1とSD11の壁断面再観察から本来1条の溝跡で中間部は畝状の高まりとなる可能性が考えられた。この点からするとSD1・11はSD8の中央部に延びるものと考えられる。SD11とSD8の底面標高値はほぼ同じである。SD11南辺部はSD3へ続くものと判断され、第3次調査の小トレンチ南側部は土塁部分となり、さらに南側に今回調査のSD1が存在することになる。SD8底面には溝に並行する一段高い2条の畝状の高まりとそれに取り付く一段低い畝群が確認されている。特異な形態をもつこれらの遺構群は複雑な底面状況からも水利施設とは考えにくく、戦国期特有にみられる堀底に設けられた防御施設—障壁—とするのが妥当かと思われる。静岡県小田原城・山中城で確認される障壁（障子堀）とは形態等に相違はみられるが障壁の一形態と理解すべきものと判断される。仙台市内においても規模等違いはあるが同様の遺構が北目城跡・洞ノ口遺跡で確認されている。城館自体の調査例が少なく普遍的に存在するものか今後の課題である。

なお、SD1・8は同時期での機能は確認されたが、溝の方向・内部形状等不統一で同時期での構築は考えにくい。SD2北辺ラインがSD3・8に沿っている点、城館整備拡大という

点に着目すれば、SD 8はSD 1に先行するものと考えられる。両溝跡堆積土下層は基本的に泥炭層で畝状の高まりの残存からみても堀は水堀であったと考えられる。さらに、SD 1-M 溝跡・上層の出土遺物から判断して、江戸時代初期には機能を停止していたと判断される。

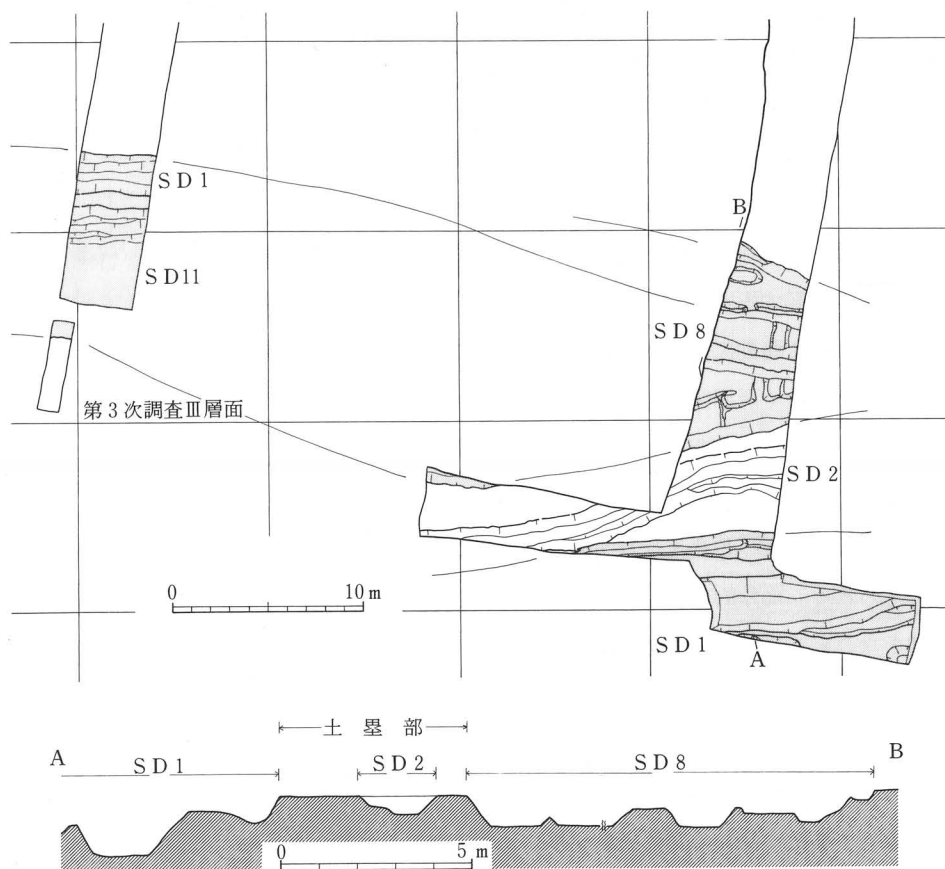


図24 調査区南側溝跡合成図

3. まとめ

今泉遺跡は標高4 m前後の自然堤防上に立地する。今回の調査地点は遺跡中央部南側の外堀推定地の北側にあたる。

調査の結果、弥生時代・平安時代・中世・近世の遺構遺物を確認した。遺跡の中心をなすものは中世の城館跡である。

弥生時代では、土器埋設遺構を確認した。すべて柵形囲式期のもので土器棺墓と考えられる。第4次にまでいたる調査で弥生時代の遺構は土器棺墓と土坑のみにとどまる。

平安時代では、溝跡を確認した。点的な確認ではあるが第3次調査の溝跡を含め、真北方向を基準とする方角なものと判断される。

中世では屋敷及び城館に伴う溝跡群を確認した。調査区南部に位置する溝跡は土塁を伴う今泉城南辺の外堀を形成する一群と考えられる。

参 考 文 献

- 須藤 隆 1984 「東北地方における弥生時代農耕社会の成立と展開」『宮城の研究』
- 白鳥良一 1980 「多賀城跡出土土器の変遷」『研究紀要Ⅶ』多賀城跡調査研究所
- 篠原信彦 1980 「今泉城跡」仙台市文化財調査報告書第24集
- 佐藤 洋 1983 「今泉城跡」仙台市文化財調査報告書第58集
- 渡部弘美 1994 「今泉城跡」仙台市文化財調査報告書第185集
- 金森安孝 1994 「北目城跡」仙台市文化財調査報告書第197集
- 池田光雄 1988 「堀内部障壁の一形態について」『中世城郭研究』第2号
- 小笠原清 1988 「障子堀・堀障子および堀底特殊構造について」上 おだわら—歴史と文化—第2号
小田原市
- 仙台市教育委員会 1994 「洞ノ口遺跡」平成6年度宮城県遺跡発表会発表要旨

写 真 图 版



写真1 遺跡周辺航空写真 S. 32年(南→)



写真2 調査地点航空写真 H. 3年(南→)



写真3 調査区北側全景 (南→)



写真4 SD1溝跡東側部全景 (東→)



写真5 SD1溝跡東側部全景 (北東→)



写真6 SD1溝跡東側部全景 (北→)



写真7 SD1溝跡断面 (西→)



写真8 SD1溝跡東壁断面 (西→)

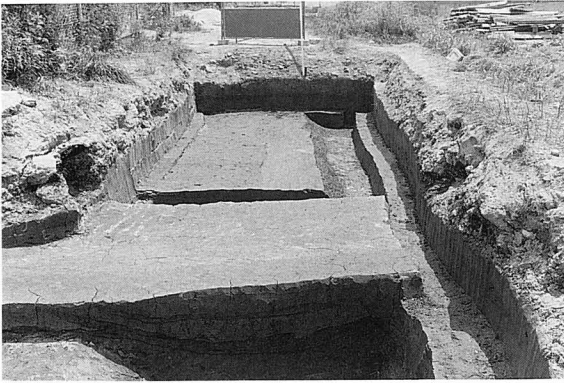


写真9 SD 1—M溝跡全景(西→)



写真10 SD 2溝跡東側部全景(西→)

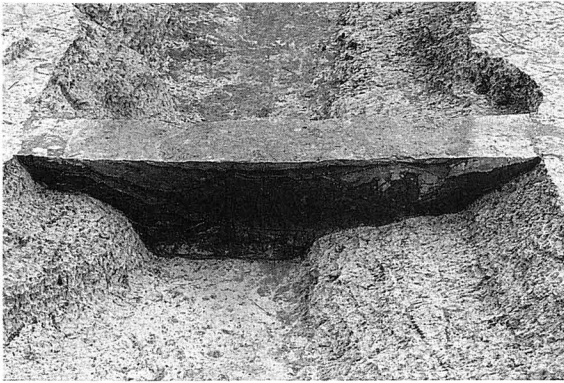


写真11 SD 2溝跡東側部断面(西→)

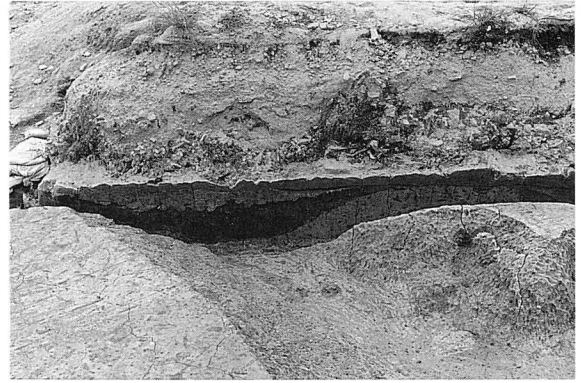


写真12 SD 2溝跡西壁断面(東→)

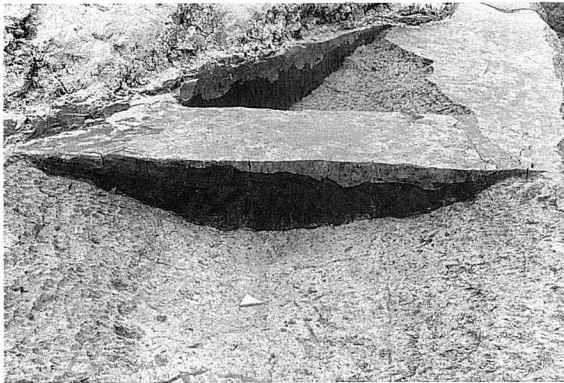


写真13 SD 2溝跡西側部断面(南西→)

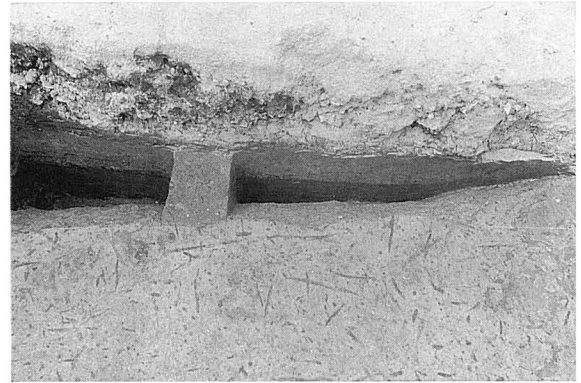


写真14 SD 3溝跡全景(南→)



写真15 SD 3溝跡断面(東→)



写真16 SD 5 a溝跡全景(西→)

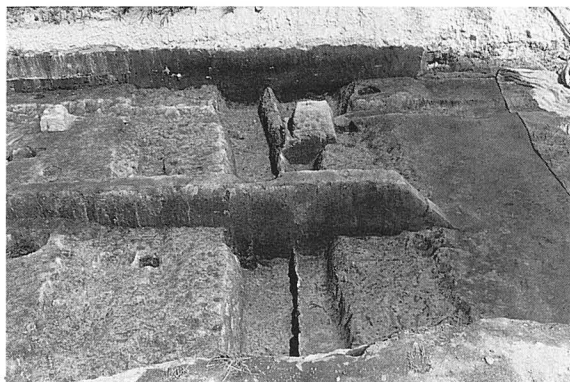


写真17 SD 5 a・5 b・5 c 溝跡全景 (西→)

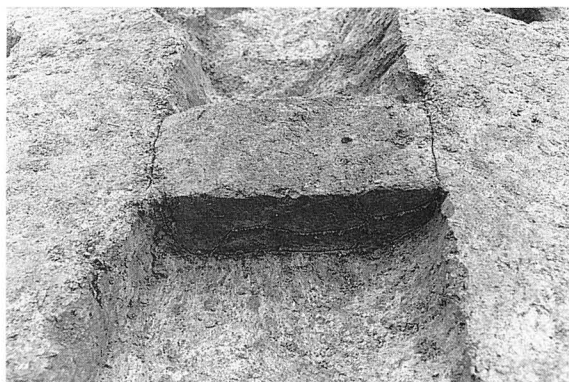


写真18 SD 6 溝跡断面 (西→)



写真19 SD 7 溝跡断面 (東→)



写真20 SD 8 溝跡全景 (南→)



写真21 SD 8 溝跡畝状の高まり確認 (北西→)



写真22 SD 8 溝跡北側部全景 (西→)



写真23 SD 8 溝跡下駄出土状況



写真24 SD 8 溝跡中央部全景 (西→)



写真25 SD 8 溝跡南側部全景 (西→)



写真26 SD 8 溝跡南側部西壁 (南東→)



写真27 SD 8 溝跡木器椀出土状況

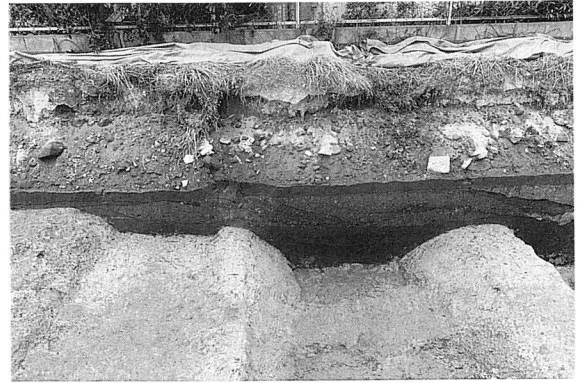


写真28 SD 8 溝跡東壁北側



写真29 SD 8 溝跡東壁南側

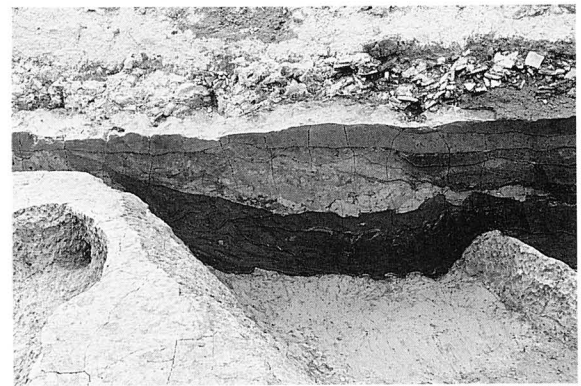


写真30 SD 8 溝跡西壁南側

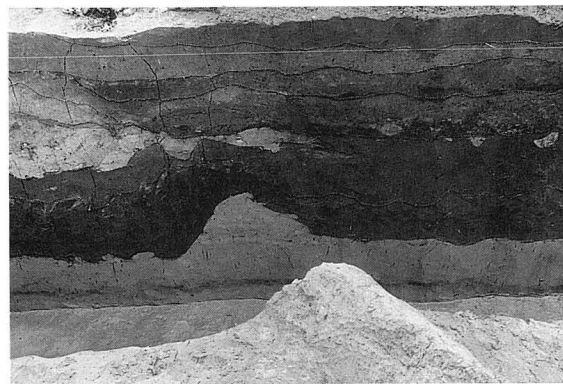


写真31 SD 8 溝跡西壁断面

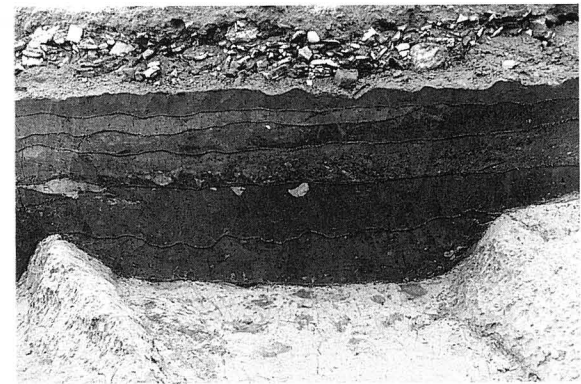


写真32 SD 8 溝跡西壁中央南側

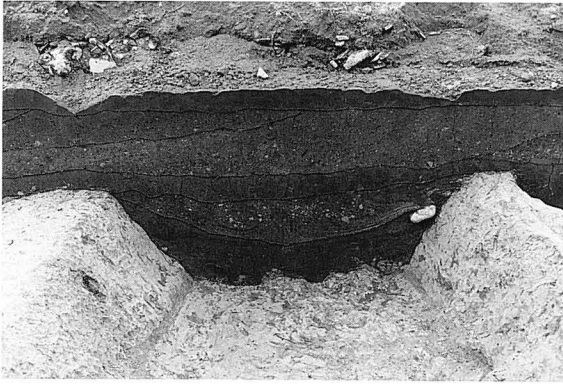


写真33 SD 8 溝跡西壁中央北側

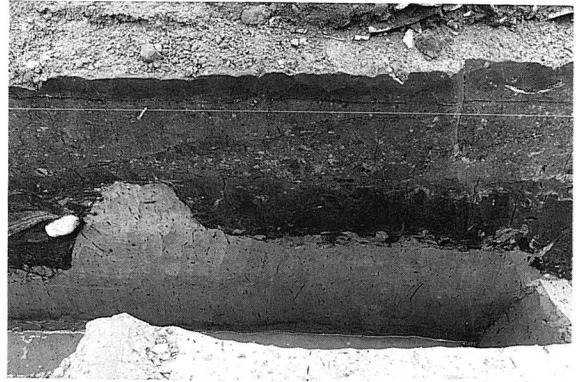


写真34 SD 8 溝跡西壁断面

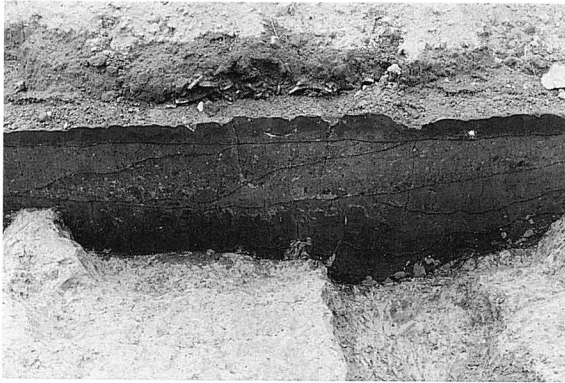


写真35 SD 8 溝跡西壁北側

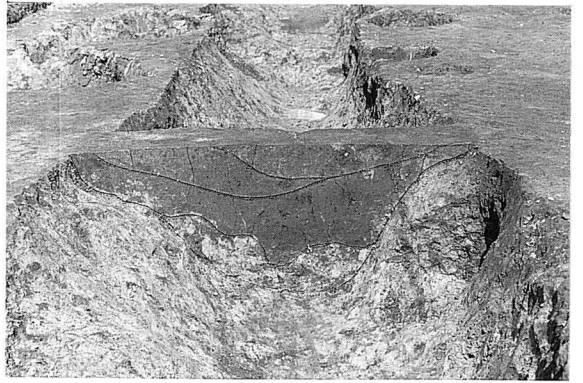


写真36 SD 9 溝跡断面 (南→)

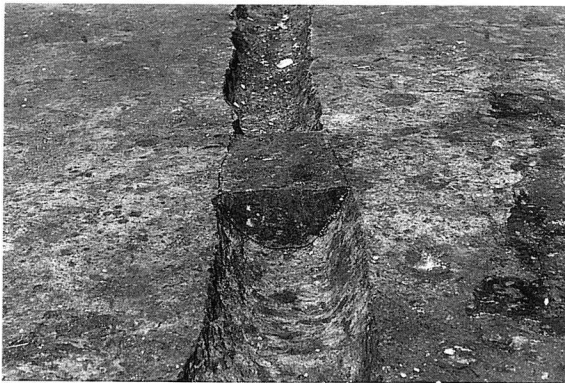


写真37 SD10 溝跡断面 (南→)

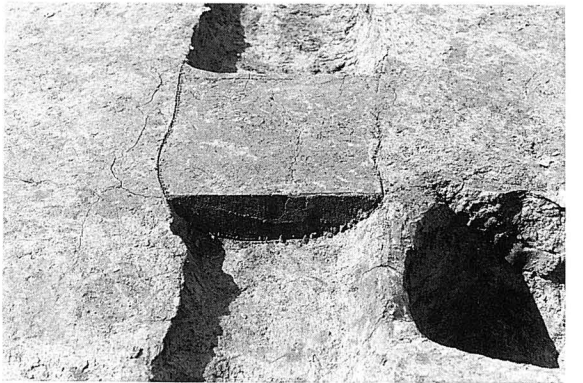


写真38 SD11 溝跡断面 (西→)

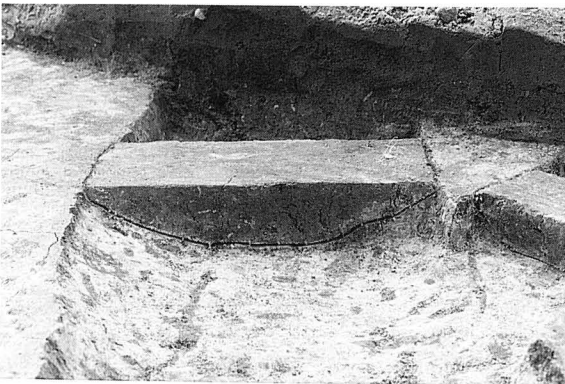


写真39 SD12 溝跡断面 (東→)

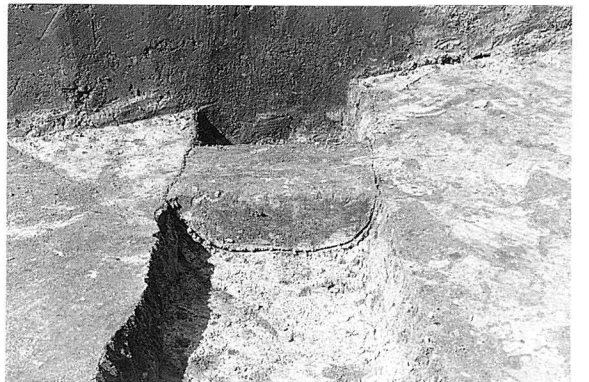


写真40 SD13 溝跡断面 (東→)

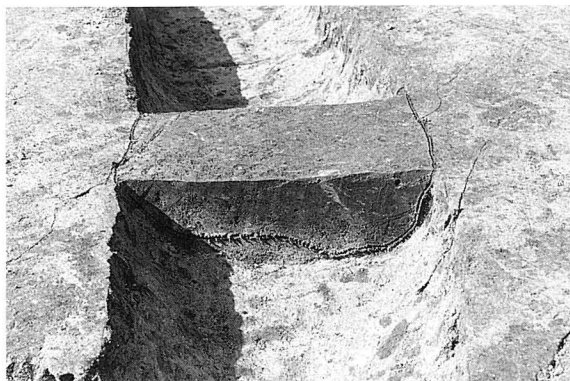


写真41 SD14溝跡断面（東→）

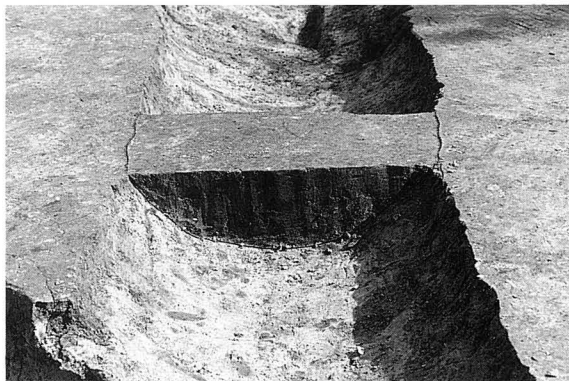


写真42 SD15溝跡断面（西→）

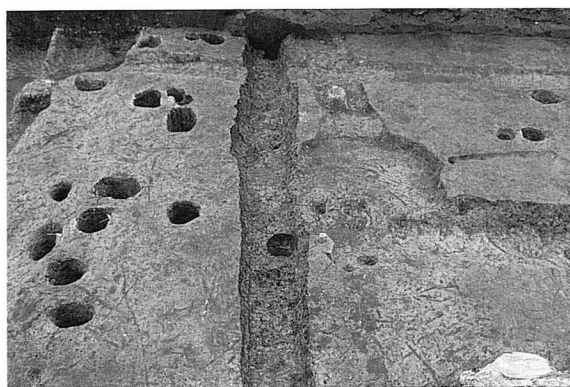


写真43 SD16溝跡全景（西→）



写真44 SD16溝跡東側部（西→）



写真45 SD16溝跡断面（西→）

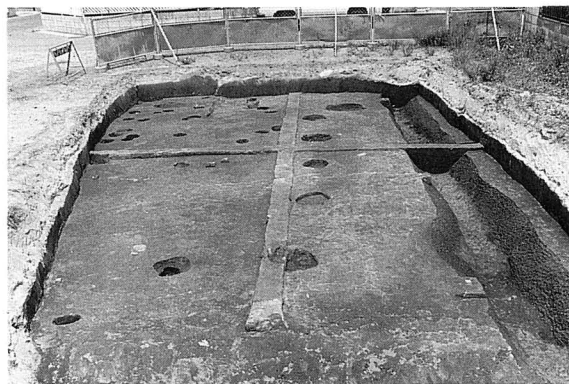


写真46 調査区北側Ⅲ層面調査状況



写真47 調査区北側部全景（西→）



写真48 調査区中央部全景（北→）

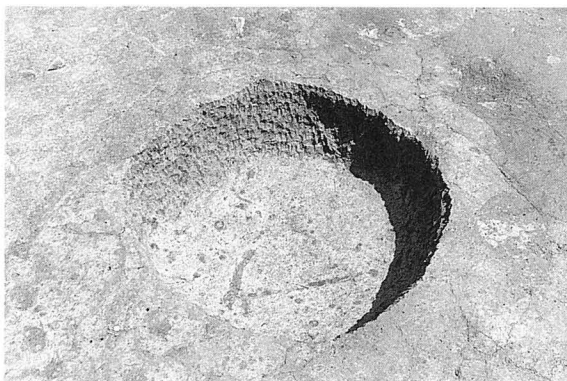


写真49 SK 3土坑全景(西→)

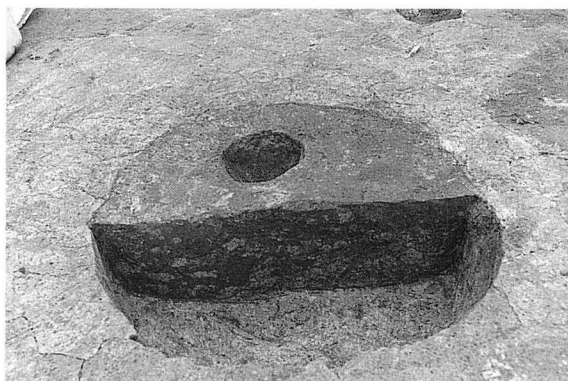


写真50 SK 3土坑断面(南→)

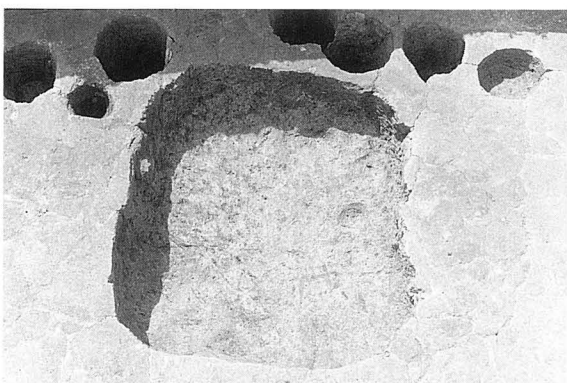


写真51 SK 4土坑全景(東→)

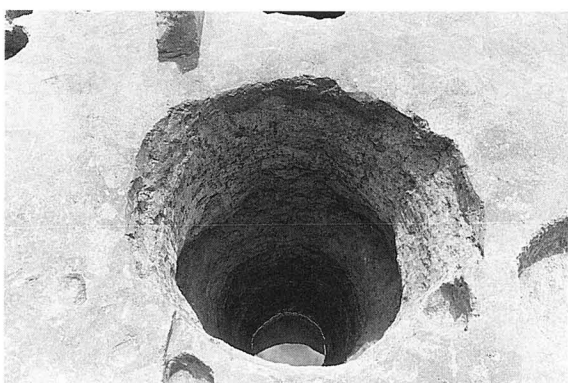


写真52 SK 5井戸跡全景(南→)



写真53 SK 6井戸跡全景(西→)



写真54 SK 7土坑全景(北→)



写真55 SK 8井戸跡内状況(西→)



写真56 SK 8井戸跡全景(西→)



写真57 SK 9井戸跡全景 (西→)



写真58 SK 10・11土坑全景 (東→)

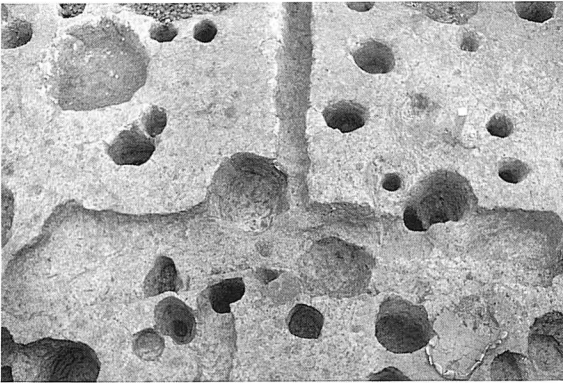


写真59 SK 13土坑全景 (西→)



写真60 SI 1 竖穴状遺構断面 (南→)



写真61 SI 2 竖穴状遺構全景 (西→)

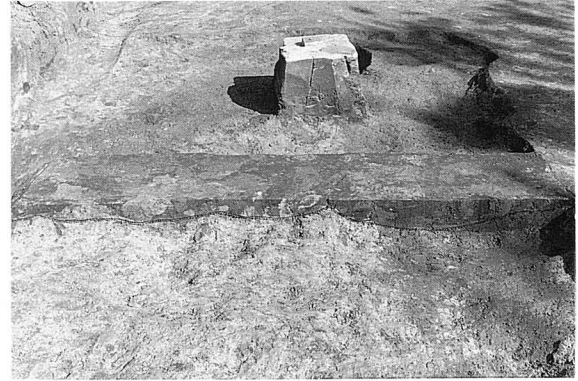


写真62 SI 2 竖穴状遺構断面 (南→)

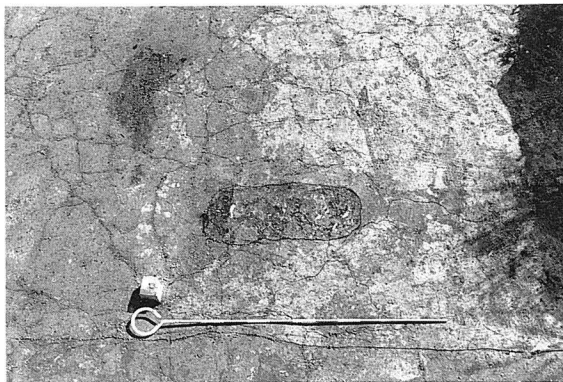


写真63 火葬遺構検出状況 (西→)

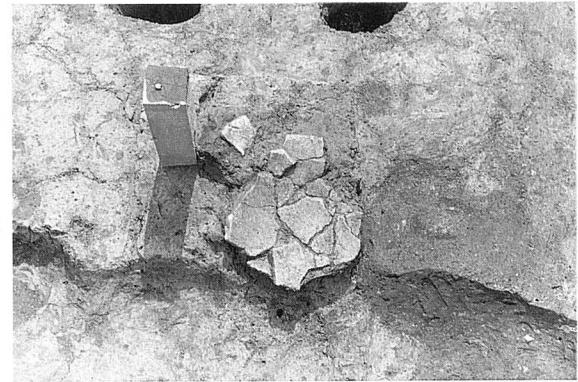


写真64 SM 1 土器埋設遺構検出 (北→)

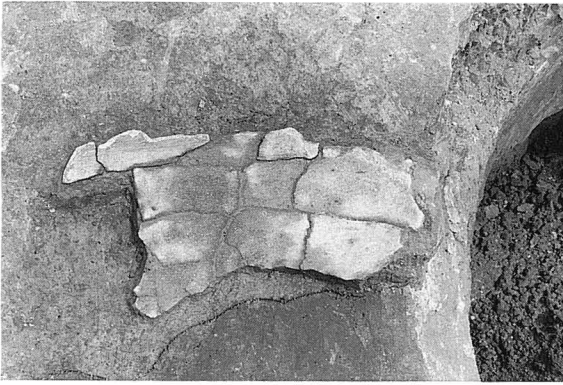


写真65 SM 2 土器埋設遺構検出 (西→)

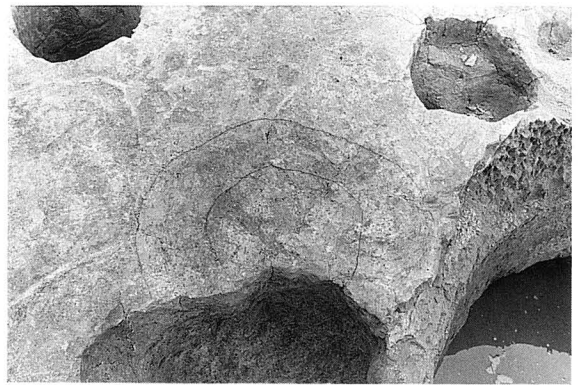


写真66 SM 2 土器埋設遺構掘り方 (南→)

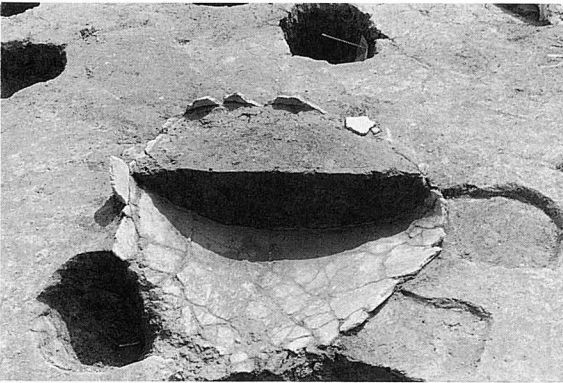


写真67 SM 3 土器埋設遺構断面 (北→)



写真68 SM 3 土器埋設遺構全景 (北→)



写真69 SM 3 土器埋設遺構掘り方 (北→)

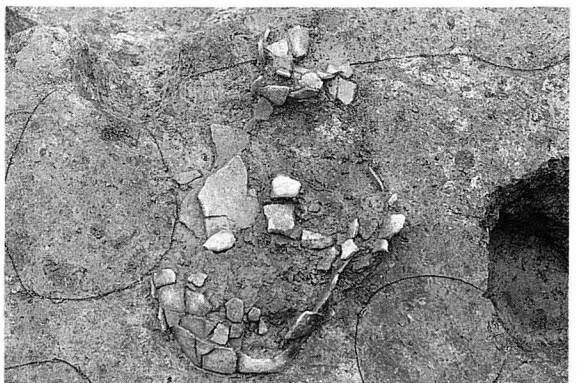


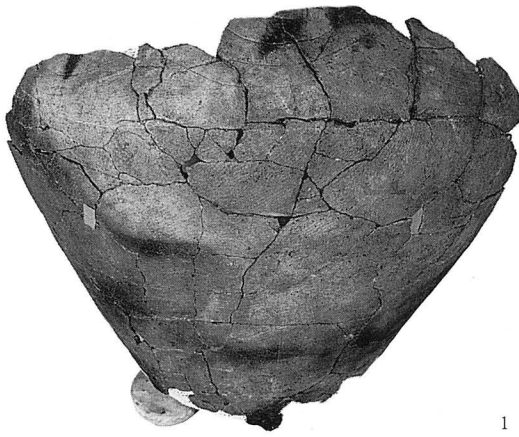
写真70 SM 4 土器埋設遺構検出 (西→)



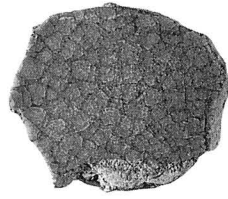
写真71 SM 4 土器埋設遺構断面 (北→)



写真72 SM 4 土器埋設遺構全景 (南西→)



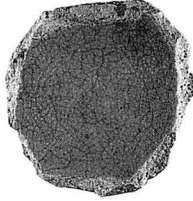
1



6



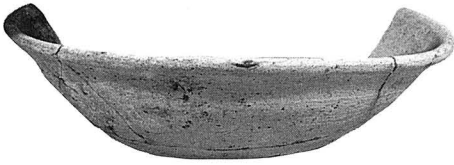
7



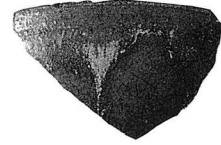
8



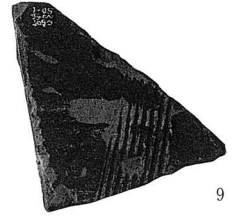
9



2



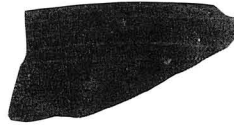
10



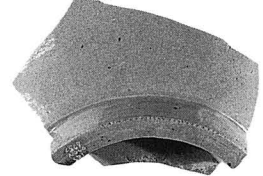
11



3



12



13



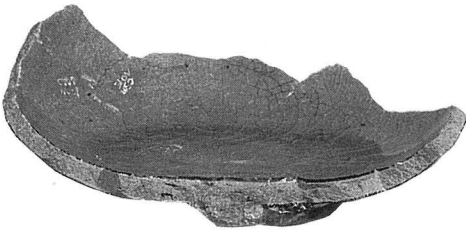
4



14



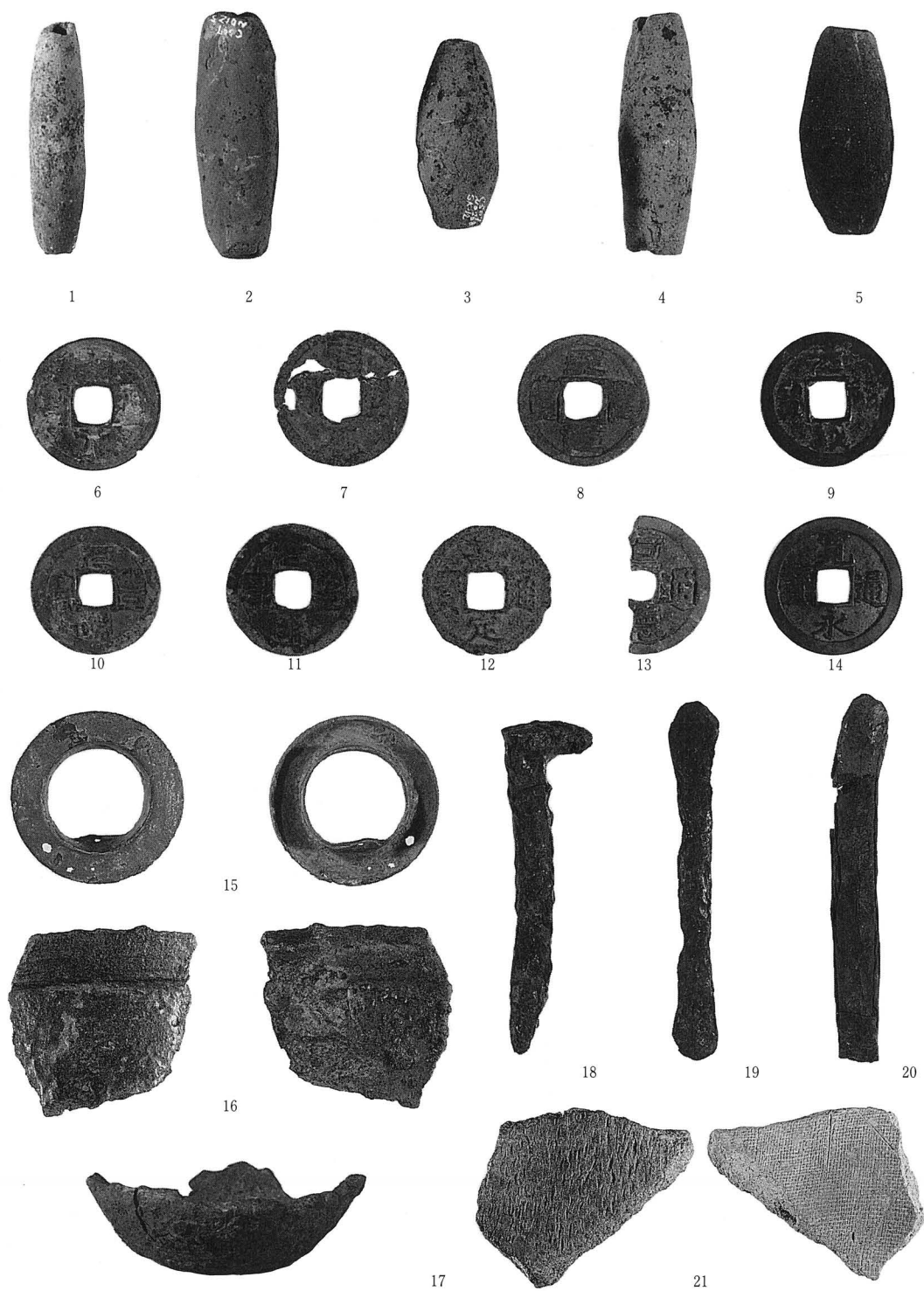
15



5

- | | | | | | |
|---|-------|----|--------|----|--------|
| 1 | 图13-3 | 6 | 图22-3 | 11 | 图22-12 |
| 2 | 图14-3 | 7 | 图22-4 | 12 | 图22-14 |
| 3 | 图14-4 | 8 | 图22-5 | 13 | 表1※① |
| 4 | 图22-1 | 9 | 图22-8 | 14 | 表2※② |
| 5 | 图22-2 | 10 | 图22-11 | 15 | 表3※③ |

写真73 出土遺物 1



1~5 图15-8、7、3、2、1 6~14 图15-9、10、11、12、13、14、15、16、17
 15 图15-18 16 图15-19 17 图15-20 18 图15-21
 19 图15-24 20 图15-25 21 图14-5

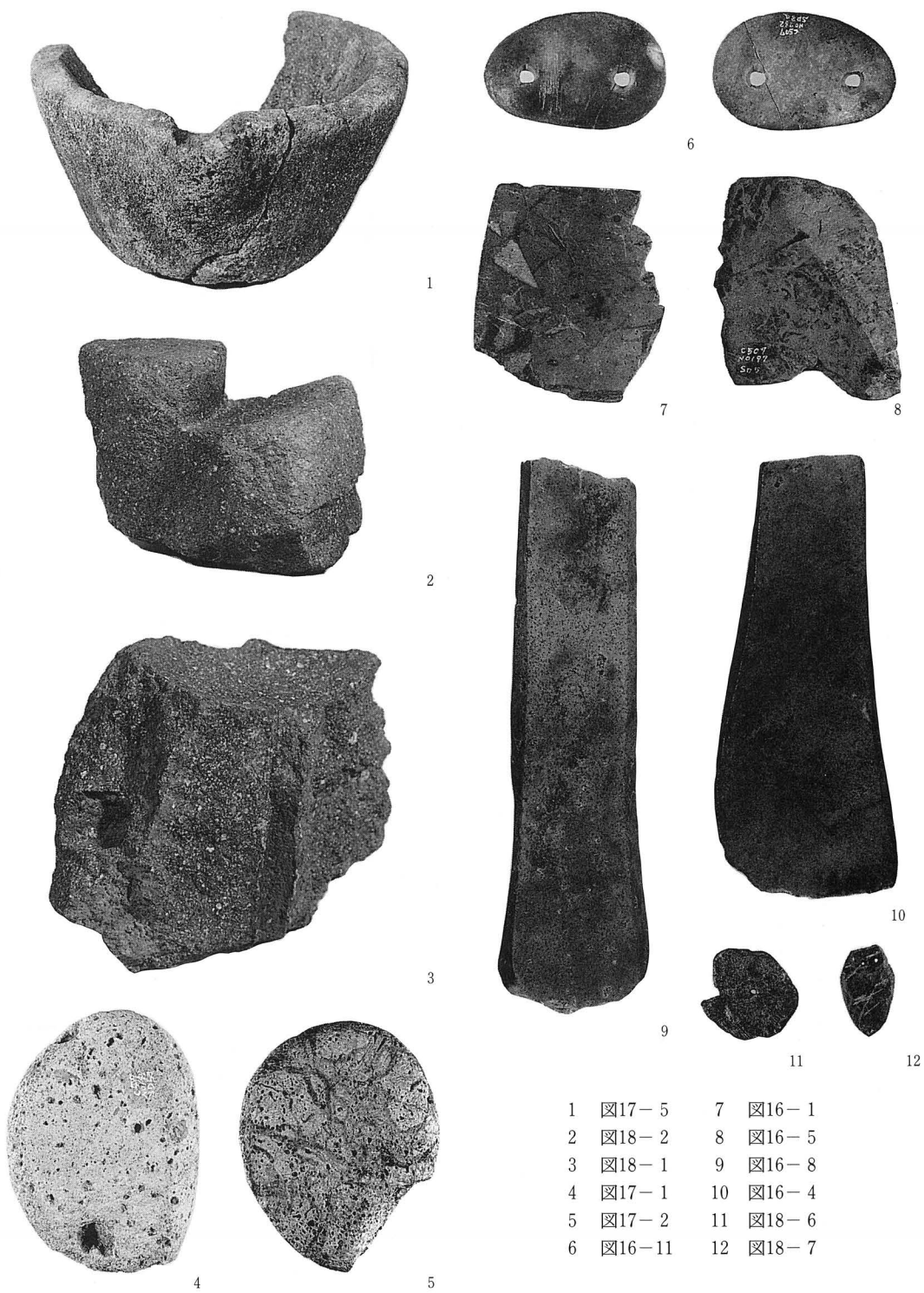


写真75 出土遺物3



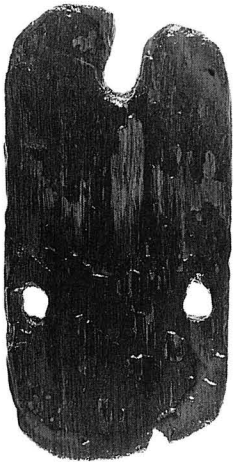
1



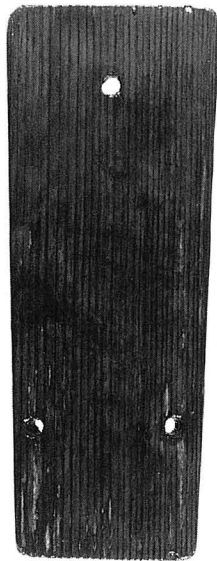
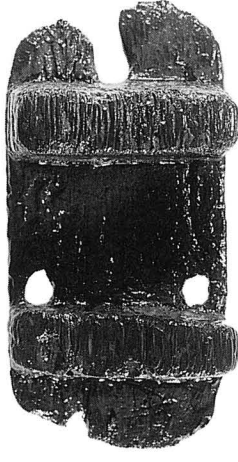
2



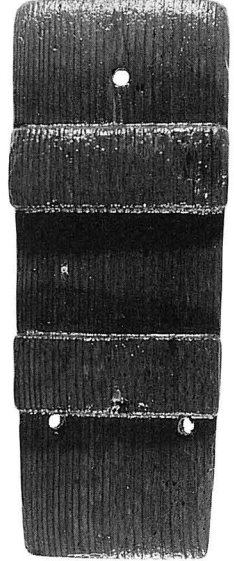
3



4



5



1 图20-5 2 图19-6 3 图19-7 4 图20-3 5 图20-1

写真76 出土遺物4

報告書抄録

ふりがな	いまいずみいせきはくつちょうさほうこくしょ							
書名	今泉遺跡発掘調査報告書							
副書名	第4次発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	仙台市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第201集							
編著者名	渡部弘美							
編集機関	仙台市教育委員会							
所在地	〒980-71 宮城県仙台市青葉区国分町3丁目7-1 TEL022-214-8894							
発行年月日	1995年3月31日							
所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
いまいずみいせき 今泉遺跡	みやぎけんせんたいし 宮城県仙台市 わかばやし 若林区今泉 二丁目18	04100	01235	38° 12' 25"	140° 55' 53"	19940705) 19941020	290	宅地造成
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
今泉遺跡	城館	弥生時代 平安時代 中世 近世	土器棺墓 火葬遺構 溝跡 井戸跡 竪穴状遺構 土坑	弥生土器壺 土師器坏、赤焼土器坏 中世陶器甕、壺、鉢 近世陶器・磁器 木製品 金属製品				

仙台市文化財調査報告書第201集
今泉遺跡

—第4次発掘調査報告書—

1995年3月

発行 仙台市教育委員会

仙台市青葉区国分町三丁目7-1
仙台市教育委員会文化財課

印刷 針生印刷株式会社

仙台市若林区六丁の目西町1-38
TEL 288-5011

